

連載 176 小松方言の語源 その1  
— 京都語由来の方言について (1) —



「この本もオゾなったなあ」

2008年にJR北陸本線沿線で行った4世代調査の結果をもとに、およそ3年間にわたって続けてきた「小松方言の世代差」を終わり、今回からは小松の方言の語源について考えていきたいと思います。語源については本連載ですでに言及したものが少なくありませんので、それらの重複をなるべく避けながら紹介していきたいと思えます。

方言はそれぞれの地方で独自に生まれ、地方特有のことばと考えている人が少なくありません。そんな思い込みや、明治時代後半からの学校での標準語教育の結果、方言は田舎の訛ったことば、汚いことばとして悪者扱いされるようになりました。もちろんそういことばがあることも事実ですが、地方で使われてきた伝統方言の多くは、かつて長く政治・文化の中心地であった京都で生まれたことばが、鉄道や高速道路、テレビ・ラジオやインターネットもない時代に、人から人へと伝言ゲームのように地方に伝えられたもの、また、それが途中で形を変えたり意味を変えたりしたもののなのです。著名な方言研究者・井上史雄氏の計算によれば、京都を出発したことは年速約1キロで地方に伝わったとされていますので、江戸時代以前に京都で生まれたことばが小松にたどり着くには、2000年程度かかったと考えてよさそうです。

そこで、まずは小松の方言で京都語由来と考えられるものから見ていくことにします。

オソイは古語「憚し」から

本連載の106回(2007年1月号)で「古」の意味でのオソイ(尾小屋など)を紹介したことがあります。小松市内で聞かれるオソイは「古い、粗末な、下手な」といった意味で使われます。オソイは平安時代の『源氏物語』などに「恐ろしい」の意味で見られる「憚し」、特に江戸時代初期の上方語文献などに「よくない」の意味で見られる「おぞい」に由来するもので、小松のオソイは近世上方語の「おぞい」の意味に近いことがわかります。「古い、粗末な」の意味のオソイは、小松だけでなく、北陸の富山、石川、福井(嶺北地方)の広い範囲と中部地方から近畿地方の一部に分布が見られます。また、「憚し」の古い意味(「恐ろしい」に近いオソイは、北陸では福井県嶺北地方南部と若狭地方の一部を中心に石川県内にも点々と分布が見え、様々に発音を変えて関東地方から西日本の広い範囲でも確認できます。

連載 177 小松方言の語源 その2  
— 京都語由来の方言について (2) —



「ごっつおさん。もう腹いっぱいや」「あらオトマシー、こんなに残いて」

がえのない地球資源に対するRespect(尊敬)の念の意味も込められていると考え、MOTTAINAIキャンペーンを提唱しました。この「もったいな」は「躍、国際語「MOTTAINAI」として世界に知られることになりました。

小松ではアッタラ、オトマシー

ところが、小松の伝統方言でモッタインイという、共通語とは少し違って「ありがたい。ありがと」に近い意味で使われます。では、共通語「もったいな」にあたる小松方言は何かというと、アッタラかオトマシーだろうと思います。

アッタラは古語「惜」に由来

小松方言のアッタラは古語「あたら(惜)」に由来します。中央語の「あたら」は奈良時代には形容詞「惜し」でしたが、「新し」が平安時代に「新し」に変化したために、「惜」「あつたり」ともはそれとの同音衝突を避けて副詞・連体詞として残ったと考えられています。小松のアッタラは、その副詞・連体詞の「あたら(惜)」が

伝わったものでしょう。『日本方言大辞典』(小学館)によれば、「惜しい。もったいな」の意味の「あつたら」は、小松のほか、岩手県、宮城県などの東北の一部、埼玉県、長野県、新潟県、富山県、岐阜県などの関東・中部・北陸地方の一部で使われていることがわかります。

オトマシーは「疎まじい」からの変化形

同じく「惜しい。もったいな」の意味の方言オトマシーも、かつての京都語「疎まじい」に由来するものです。古語「疎まじい」の意味「気が悪い、いとわしい、嫌な感じだ」の「嫌な感じ」の意味が、方言として形と意味を変えたものと考えられています。前出の『日本方言大辞典』によれば、「惜しい。もったいな」の意味のオトマシーは、小松を含む北陸三県のほか、岐阜県飛騨地方、愛知県、三重県などで使われているようです。

「もったいな」が国際語MOTTAINAI! 2004年にノーベル平和賞を受賞したケニア人のワンガリ・マータイさんは、2005年の来日時に「もったいな」という日本語を知り、それが、マータイさんが取り組む資源の有効活用、3R (Reduce、Reuse、Recycle)を簡潔に表す言葉であり、さらに命の大切さや、かけ

連載 178

小松方言の語源 その3  
—京都語由来の方言について—



「あらー ウマソナ子やねえ」「うん、ほく元気もりもり!」

明けましておめでとつございます。本連載をこの言葉で始めるのも今回が14回目。今月から連載も足かけ15年目に入ることになります。今後ともご愛読下さい。さて、前々回から始めた「小松方言の語源」シリーズ。今回も、京都語由来の方言について見ることにします。

ウマソナ子って「おいしそうな子」?

小松をはじめ、石川・富山両県の範囲で広く聞かれる方言に、丸々と太った健康そうなお子さまをさして言うウマソナ子と聞いた言ひ方があります。地域によつてはウマソナ、ウマソイ、マソソイなどの発音も聞かれます。

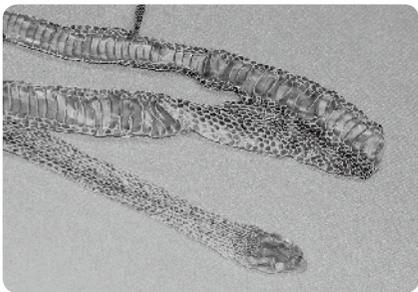
ただ、石川・富山以外の出身の母親が、ふくよかで健康そうなお子さまを抱いていて、地元の人から「ウマソナ子やねー」と言われたら、さぞ驚くことでしょう。人の子を見て「おいしそうなお子」とは何事だ、というわけです。「ウマソナ子」と言った人はほめているつもりなのですが、「おいしそうなお子」の意味が「健康そうなお子」のウマイ、ウマソナ子があるから、その意味と誤解されることになるのです。石川・富山以外の人からすれば、ずいぶん人騒がせな方言ということになります。「おいしい。味がよい」「ウマイは、すでに奈良時代の中央語(当時の奈良、その後の京都)に使用例が見られるク活用形容詞「うまし」に由来するものと考えられます。

ますが、「ウマソナ子」と言う場合のウマソナは、奈良時代の万葉集に「うまし国そあきづ島大和の国は」のように登場する、「十分整って美しい。すばらしい」の意味のシク活用形容詞「うまし」が北陸に伝播し、「すばらしい」の意味から、石川・富山の旧加賀藩域ではさらに、「ふくよかで立派な」の意味を持つに至ったと考えられています。

なお、語形的には、シク活用形容詞の「うまし」が「うましい」を経てウマソイに変化し、ウマソイが一方ではソマソイ、マソソイに変化し、一方ではウマソナ(形容詞型に変化したものと思われる)。ウマソナ子のウマソナのように、ある方言形と同じ形の共通語形があると、他地域の人には誤解されることがあるので注意が必要です。「もらえる」の意味の「アタル」、「利口で聞き分けのよい(子)」、「カタイ(子)」、「程度が大きい」ことを言う「ガンコナ」などもそのような例と言えるでしょう。

連載 179

小松方言の語源 その4  
—京都語由来の方言について—



「このキン、財布に入れとくとお金貯まれんよ」

今年の干支は巳、つまり蛇の年です。そこで、今回は巳年にちなんで、京都語由来の小松方言の例として、蛇の抜け殻を指すキン、ケンを取り上げます。ちなみに、小松市内での蛇の抜け殻の方言については、本連載の41回(2001年8月号)で一度紹介したことがあります。

蛇の抜け殻を言うキン、ケンは衣から

連載41回目でも書いたように、蛇が脱皮したあとに残される蛇の抜け殻の小松市内での方言の代表形がキンあるいはケンでした。そして、わずかな地点ではありますが、キヌも聞かれました。このことから、小松で聞かれるキン、ケンは、キヌがキンに、さらにキンがケンに変化した形であることがわかります。

現代日本語でキヌという語、普通は絹織物の「絹」を指すと思ってしまうのですが、蛇の抜け殻をいうキヌは、衣服・着物を指す古語の「衣」が語源です。『日本国語大辞典』(小学館)によれば、衣服・着物を指す「衣」という語は、奈良時代の古事記万葉集・平安時代の源氏物語、更級日記などにすでに登場する古い言葉です。

現在、共通語も含めた本土の方言では、衣服・着物の意味でキヌを使う地域はほとんどありませんが、琉球方言地域では「衣」から変化したキン、チンが今も使われています。

次は、沖縄の首里方言(現在の県庁所在

地的那覇市方言)で語られた昔話の「桃太郎」の一節です。

(前略)アルフィー タンメーヤ ヤマンカイ タムン トウイガンメーヤ  
カーランカイ チン アレーガイ  
チャビタン

(共通語訳:ある日、おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました)

(NHKサービセンタールCD教材『日本の方言』より)

この中の「チンアレーガ」は「着物を洗いに」洗濯に「の意味で、このチンが「衣」から変化した形なのです。

ところで、中世末期の京都語を記録していることで知られる、キリシタン資料の『日葡辞書』には、「Oinnon(キヌ)又グ(訳)蛇が脱皮する」の記述が見られます。昔の人は蛇の抜け殻を蛇が脱いだ着物にキヌに見立てたのでしょう。中世末期に京都で使われていた蛇の抜け殻をも指すキヌが小松にも伝わり、それに音声変化が起こって、キンやケンが生まれたと考えられるのです。

連載 180  
小松方言の語源 その5  
— 京都語由来の方言について —



「ここにメブツテできてしもた。眼医者行ってこんな」

今回は「麦粒腫」の方言を取り上げます。

「麦粒腫」の方言については、小松市内での分布については本連載の8回目、JR沿線での世代差については174回目でも取り上げたことがあります。市内で広く聞かれる「麦粒腫」方言の代表はメモライ(音声変種としてのエモライ、イモライ、メモレ、メモロー、イモリなどを含

む)でしたが、今回はそこでも紹介した、大日川上流部の丸山に分布するホツテ、そして大杉谷川上流部に分布するメブツテ、メブツター、ネブツターと、かつての中央語(京都語)との関係について考えてみたいと思います。

メブツテ(一)、ネブツターは「目陪堂」から

小松市内で比較的古い方言の分布が見られることが多い山間部の大日川と大杉谷川の上流部で聞かれたホツテ、メブツテ、メブツター、ネブツターは、かつて中央語で使われた可能性のある(文献例は確認できていませんが)「目陪堂」に由来すると考えられます。国立国語研究所編『日本言語地図』で「麦粒腫」方言の全国分布を見ると、東日本では東北の秋田県、西日本では中国地方の鳥取、島根、岡山、広島県にホイト、メボイトのまとまった分布が見えます。小松のホツテ、メブツテ、メブツター、ネブツターも、このホイト、メボイトと語源を同じくするものだろうと考えています。

ホイトとは、本来仏教用語で「禪宗の僧が僧堂の外で食事の末をなしを受けること」を意味した「陪堂」で、後に「人に施しを受ける人(こと)」、「つまり「乞食」の意味となりました。よって、メボイト(目陪堂)は「目十乞食」の意味です。ホイト、メボイトが「麦粒腫」の方言となったのは、この眼病に関して、「他人から何か物をもらうと治る」という俗信が全国各地に見られることと関係があると考えられています。かつて中央語で「麦粒腫」の意味で生まれたメボイトが近畿地方から周辺に分布を拡げたと考えるわけです。『日本言語地図』では、ホイト、メボイトの分布の内側にメコジキ(ホイトをコジキに変えた)やメボ(メボイトの下略形)の分布が見えます。福井県嶺北地方北部から石川(奥能登を除く)、富山にかけて広く聞かれるメモライも、「メモモライ(人から物をもらう)」の意味で生まれた方言と考えればよいでしょう。

連載 181  
小松方言の語源 その6  
— 京都語由来の方言について —



「コーヒーをどうぞ」「あらイトシゲニ」

今年もまた4月を迎え、本連載は16年目に入ります。こうして長く書き続けて来られたのも、小松の皆さんが読んで下さっているからこそと、感謝申し上げます。

連載16年目のスタートも、前回までに続いて京都語由来の小松方言の話題です。

アテガイナは古語「あてがい」から

小松市内の広い範囲で聞かれた「いい加減な」の意味のアテガイナ(アテゲナの形も)は、かつての中央語(京都語)の名詞「あてがい」(漢字では「宛行」「充行」と書かれます)に由来するものと考えています。古語「あてがい」は現代語の動詞「あてがう」のもとになった語と考えられ、「見込み。予測」、「心配り。取り計らい」、「割り振って与えること」、「職務に対する報酬」として与えられる土地・金銭などといった意味がありますが、小松のアテガイナ、アテゲナは、この中でも中世の仏教説話集『沙石集』(1283年成立)などに用例が見える「見込み。予測に近い意味の「あてがい」が、形容語(形容動詞)化して小松に伝わる過程で「いい加減な」の意味で使われるようになったものと考えられます。石川県内では、小松市以外でも「いい加減な」の意味のアテガイナが使われる地域は少なくありませんし、富山県砺波地方などでも使われるようです。

相手の労をねぎらう感謝の言葉も京都由来

小松で使われる「ありがと」にあたる感謝の言葉の方言というとき、金沢や小松の町部で使われるアンヤトのほかに、北陸地方の広い範囲で聞かれるキノドクナ、市内の南部地域や東部地域で聞かれるイトシゲニ(エトシゲニとも)、そして東部地域の山間部、丸山、大杉、尾小屋などで聞かれるシヨーシャ(シヨーシャ、シヨッシャナーとも)があります。キノドクナ、イトシゲニ、シヨーシャは、いずれも自分に気遣いをしてくれた相手のことを気の毒に、かわいそうに思う気持ちや感謝の表現となったものと考えられます。キノドクナが「気の毒」に由来することは明らかですが、イトシゲニとシヨーシャも、それぞれ「かわいそうだ」の意味のかつての京都語「愛し」(形容詞)、「笑止」(形容動詞)に由来するものと考えられます。市内での分布からは、シヨーシャ→イトシゲニ→キノドクナの順で変化したと考えています。

連載 182  
小松方言の語源 その7  
—京都語由来の方言について—



「普段はイチガイ(?)なおじいちゃんも孫の笑顔には負けるなあ」

意外に広いイチガイの分布

小松方言のイチガイについては、先の尾小屋の例のほかにも、小松市教育研究所『町史にみる小松の方言』(1993年)によれば、「思いを通す」の意味の形容語イチガイナが『軽海町史』に、「途な」の意味の形容語イチゲナが『中海町史』に、「二つのことこたわる。堅苦しい」の意味のイチゲナが『草野町史』に載っていることがわかります。イチゲナはイチガイナの一部がゲーに変化し、さらにその長音が脱落した形です。

石川県内では、小松以外にも、「短気な」の意味のイチガイナ、「短気者」のイチガイモンが新田露子『七尾地方の方言集』(1996年)に、「強情な」の意味のイチガイナが志受俊孝『金沢の方言』(1983年)に見えるなど、各地の方言集等で確認でき、県内のかなり広い範囲で使われているようです。また、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、石川県以外にも新潟、富山、岐阜、鳥取、島根、岡山、広島、山口、愛媛、高知などの県、つまり、か

つての中央語地域の近畿地方の周辺に分布していることがわかります。  
右で述べたイチガイの全国的な分布状況からも推定されるように、イチガイはかつての京阪語「いちがい」(漢字をあてると「概」)に由来するものです。  
『日本方言大辞典』によれば、文献例として、中期の「毛詩抄」(1532~55年成立)の使用例をはじめ、江戸期の「日葡辞書」(1603年)や浄瑠璃「八百屋お七」(1714~17年頃初演)の例が見えます。

その意味は、「日葡辞書」に「chingano (イチガイ)ニタツル(訳)自分の意志を強情に通す」とあるところからも、中世末期から江戸初期頃の京阪語の意味とほぼ同じ状態で小松に伝わり、方言として使用されてきたことがわかります。それに対して、七尾方言の例は、意味が少し変化した結果「短気な」の意味を表すようになつたと考えられます。

連載 183  
小松方言の語源 その8  
—京都語由来のイチケとイチチョライ—



「生まれて初めてのイチチョライ」(3歳の七五三参りにて)

今回は京都語由来の小松方言の中から、「親類(親戚)」を指すイチケと「一番上等の晴れ着」を指すイチチョライを取り上げます。

イチケは「一家」から

現代共通語で「一家」と書くと、「いっか」と読んで、「一家でピクニックに出かける」のように「一つの所帯」を指したり、「団結の固い組織」を指したりするのが一般的ですが、小松方言で広く全域で聞かれ

イチチョライは「張羅・張来」から

小松方言で「一番上等の晴れ着」を指すイチチョライ。南の福井県では、置県80年と北陸トンネル開通(1962年)を記念して発表された新民謡「イチチョライ節」のタイトルにも使われている方言です。

イチチョライは、かつて中央語で、同様の「一番上等の晴れ着。たった一枚きりの衣服」といった意味で使われた「張羅」に由来する方言です(現代共通語でも「張羅」が使われないわけではありません)。(江戸時代前期の近松門左衛門の浄瑠璃『心中天網島』(1720年)に「黒羽二重の張羅」のような例が見えます。文献に「張来」の例も見られますから、小松方言のイチチョライはその「張来」の形が伝わって、方言として使われていると考えることができそうです。

連載  
184

### 小松方言の語源 その9 —京都語由来のモノイとテキナイ—



「ばあちゃん、もつとボール遊びしょ〜!」  
「あ〜しんど。孫守りもモノイわ」

ての京都語の「物憂し」(後に「物憂い」に  
変化)に由来するものです。

古語としての形容詞「物憂し」の意味は、『日本国語大辞典』(小学館)によれば、①気が進まずおっくうである。何となく倦みつかれて身心がすっきりしない。だるくて大儀である、②「何となく心がはればれとしない」、③「何となくつらい。いやである。やりきれない。わびしい。苦しい」と説明されており、本来は精神的に苦しいことを表していた語であることがわかります。

小松方言と似た意味で使われるモノイは、小松だけでなく、石川県加賀地方と富山県の広い範囲に分布します。京都方面からモノウイが北陸地方に伝わる過程で、モノウイ→モノイと変化したと考えられています(富山県東部にはウイの形も)。それに対して、南の加賀市と、それに続く福井県では、モノウイ→モノグイを経て生まれたと考えられるモノゴイが使われています。筆者(越前市出身)の場合には、「精神的につらい」はモノゴイ、「疲労や病気で」肉体的につらい」はエライ、テキ

ネーで使い分けていたように思います。  
テキナイは「大儀な」からか?

「疲労や病気などで体調が悪い」ことを表すテキナイは、小松をはじめ、北陸三県の範囲で使われるものです。能登地方では発音の変化したテキナイが使われています。語源ははっきりしませんが、古語「大儀な」に、意味を強調し形容詞を作る接尾辞「ない」を付けた「大儀ない」に由来するものと筆者は考えています。

「大儀ない」から変化したと考えられる「てきな」は、江戸時代前半の浄瑠璃「心中宵庚申」(1722年初演)に「喉がつかまってぎゅぎゅちゅ、てきな、こんでござりまする」の例が見えますし、江戸時代の全国方言集『物類称呼』(1775年)には、「労して苦しむことをせつないといひ又じゆつないといふを加賀にて〇てきな」と云とあり、江戸時代半ばにはすでに加賀地方で使われていたこともわかります。

連載  
185

### 小松方言の語源 その10 —京都語由来のカザとテンポ—



「テンポにええカザしてきたな」  
「もうそろそろ食べ頃やよ」

今年も暑い夏になりそうです。暑い時期は食べ物腐りやすく、危ないと思っただけ「におい」をかいで大丈夫か判断している方もいるでしょう。今回は京都語由来の小松方言の中から、その「におい。香り」を指すカザ、そして「大変な。法外な」など、「程度が甚だしい」ことを指すテンポを取り上げます。

### カザは中世期以降の京都語に由来

「におい。かおり」の方言として使われるカザについては、本連載のどこかですでに取り上げたような気がしていましたが、確認したところ、今回が初めてのようです。「においをかぐ」ことは、カザカク、カザガスのように言います。

国立国語研究所編『日本語地図』で「におい」の方言の全国分布を見ると、カザは佐渡島を東端として、北陸三県と岐阜県から西(近畿地方、中国地方の鳥取・岡山・広島県、四国地方、九州地方東南部と沖縄県)の広い範囲に分布していることから、かつての中心地・京都を発信地として、小松を含む北陸地方をはじめとした西日本各地に分布したものと考えられます。

『日本方言大辞典』(小学館)によれば、カザの文献例として鎌倉時代の語源辞書『名語記』(1275年成立)に「香をかざといへり、如何。くささまを反せばかさ」の例が紹介されていて、京都語として鎌倉時代にはすでにカザが使われていた

ことがわかります。

### テンポは近世初期の京阪語に由来

テンポについては本連載の104回(2006年11月号)の「数量に関する方言」でもご紹介したことがあります。テンポ、タカナイカ(すごく高くないか)のような使い方のほか、テンポナ、ヒトデヤッタ(大変な人出だった)、テンポニヤカマシー(とても騒がしい)のように、テンポナ、テンポニの形で使われることの方が多いようです。

テンポについても『日本方言大辞典』によれば、「思い切つてすること。また、そのさま」の意の「てんぼ」の文献例が、江戸時代の浮世草子『日本永代蔵』(1688年刊)に「吉人に銀四匁つ取て突当りたる方へ家を渡すなれば、てんぼにして銀四匁と札を入れる程に」のように見え、この意の方言例として石川県鳳至郡の例も載ることから、近世初期の京阪語「てんぼ」が北陸に伝わる中で、小松方言のような意味でも使われるようになったと考えればよいでしょう。

連載  
186

### 小松方言の語源 その11 —京都語由来のイサル、カサ ダカナ—



「窓の上のハチの巣、オトロシヤ」  
「なーにかサダカナ、たかが虫やがい」

すでに10回にわたって、かつての中央語であった京都語由来と考えられる小松方言をご紹介してきましたが、読者の皆さんの中には、それらが中央語とは無縁な地域独特のことばと思っていた人もいるに違いありません。

今回も引き続き、京都語由来の小松方言と考えられるものの中から、「いばる。憤る。騒ぐ」といった意味を表すイサル

(「イサルの形も」と、「大げさな」の意味のカサダカナを取り上げます。

### イサルは自動詞「勇む」からの変化か

『日本方言大辞典』(小学館)によれば、「いばる。自慢する。見えを張る」の意味のイサルが、石川県金沢市と石川郡のほか、福井県、岐阜県、福岡県、「憤る」の意味のイサルが石川県能美郡、「騒ぐ」の意味のイサルが石川県と新潟県西頸城郡にあるとの記述があります。同辞典には、ほかに「叱る」の意味のイサルが石川県と富山県の氷見、砺波にあるとありました。小松でも「叱る」の意味でイサルを使う地域はあるのでしょうか。

ところで、イサルについては、北陸三県のほか、新潟や岐阜、そして西の福岡に分布することから、かつて京都を中心に分布を広げたものの名残かと思われます。

語源については、古語の自動詞「勇む」(「気負ってはやり立つ。勢い込む」の意味)が、ラ行五段動詞、一段動詞、力変・サ変動詞の基本形が全て〜ルで終わることへの類推で、北陸に伝わるうちに、イサム

からイサルに変化したものだろうと考えられています。小松市内では、イサルの語頭イがエに変わったエサルもよく聞かれます。

### カサダカナは「嵩高な」に由来

小松方言で「大げさな」の意味で使われるカサダカナは、古語辞典等によれば、「數量が多い。おおげさだ」の意味の近世語とあります。カサダカは漢字で表すと「嵩高」となります。

『日本方言大辞典』(前出)によれば、使用地域は新潟県西頸城郡と富山県とあり、「大げさなさま。たいそうなさま」の意味での文献例として、近世前期の浄瑠璃・妹背山婦人庭訓(四)1771年初演の「いかに嘉例の祝ひでも、あんまり騒ぎがかさ高な」を挙げています。同辞典には石川県での使用例は載っていませんが、少なくとも金沢市から加賀市にかけての加賀地方では間違いなく使われています。

連載  
187

### 小松方言の語源 その12 —京都語由来のウタテナ、オ クモジ—



「このオクモジ、うまそうに漬かったぞいね」

今回も引き続き、かつての中央語であった京都語に由来すると考えられる小松方言を紹介します。取り上げる方言は、「困った様子」を表すウタテナと、「野菜の葉や茎を漬けたもの」を指すオクモジです。いずれも、本連載ではこれまで一度も取り上げていないものです。

### ウタテナは中世京都語に由来

「困った様子」を表す小松方言ウタテナは、市内全域で使われたものではないようです。小松市内の町村史の類では、市の北東部にあたる「軽海町史」にウタテナ、「中海町史」にウタテナが変化したと思われるウタツチャが載っているだけです。

かつての中央語としては、古代の万葉集にすでに用例が見える副詞「うたて」があり、平安時代に入ると、それから生じたと考えられる形容詞「うたてし」がありますが、小松方言のウタテナは、中世の説話集「宇治拾遺物語」(13世紀前半成立)などに用例の見える形容動詞「うたてなり」(「憎むべきだ。情けない」の意)に由来すると考えられます。『日本方言大辞典』(小学館)によれば、方言としてのウタテナ、ウ

タテナは、北は東北・青森から南は九州・鹿児島までの広い範囲に分布していることが分かりますし、ウタテナと関連すると思われる、「うるさがるさま。めんどうがるさま。ものういさま」の意味のウタチ、タッチが石川県江沼郡の例として載っ

ています。

### オクモジは中世の女房詞に由来

「野菜の葉や茎を漬けたもの」を指すオクモジは小松市全域で使われていた方言です。小松市を含んで北陸三県の広い範囲で使われ、『日本方言大辞典』によれば、北陸以外にも近畿・中国・四国・九州の西日本各地に分布していることがわかります。

オクモジは、室町時代に宮中に仕えた女房が使った女房詞に由来します。女房詞の中でも「文字詞」「語の末尾に「もじ」(文字)」を付けて隠語化する(と呼ばれるもの)の一つで、オクモジは、丁寧さを表す「お」と、「きき釜」の「き」を略した「く」に「もじ」を付けた「くもじ」との合

成語です。オクモジと同じように中世の女房詞に由来する文字詞には、今も共通語として使われている「しゃもじ」「杓子」の「しゃ」「もじ」(「や、女性の「腰巻」を指した「ゆもじ」浴衣)」「浴衣(ゆかた)」の「ゆ」「もじ」などがありません。

連載 188

小松方言の語源 その13  
— 京都語由来のオードナ、オツケ —



「今朝のオツケは豆腐と油揚げ。ウラの好物やわ」

「小松方言の語源」シリーズも今回が13回目となりますが、皆さんがお使いの、あるいはご存じの小松方言の中に、かつての中央語(京都語)に由来するものが意外に多いことがわかりただけでしよう。

指すオツケをご紹介します。  
オードナは漢語「横道」から

オードナのオードは、漢語「横道」に由来します。「横道」は本来「本道からそれた道。わき道」を指しましたが、転じて「人間としての正しい道からはずれたこと。人道に背いたこと」の意味で15世紀頃には中央語(京都語)として使われていたことがわかります。中世末期の京都語の記録として知られる『日葡辞書』(1603-04)には、「Vōdō(ワウダウ)。ヨコシマノ ミチ(訳)生活、習慣における邪悪。Vōdōna(ワウダウナ)モノ」と載っており、オードナの形もすでに使われていたようです。このオードナが伝わって石川県ではオードナと変化し、意味もずれたと考えられます。その意味のずれにも、石川県内で違いがあり、金沢では「おおげさな」に近い意味で使われるのに対し、小松では「惜しげなく」「横着など」といった意味で使われています。県内では、ほかに「大胆な。無鉄砲な」や「おっとりしている。のんきな」の意味で使われる所も

あって、中央語の原義からの多様な派生が確認できます。  
オツケは中世の女房詞に由来

オツケは、動詞「付ける」の連用形が名詞化した「つけ」に丁寧さを添える接頭辞「お」が付いたもので、前号で紹介したオクモジ同様、室町時代に宮中に仕えた女房が使い始めた女房詞に由来し、本膳で飯に並べて付ける意味で「吸い物の汁」を指したものです。前出の『日葡辞書』にも「Votage(ヨツケ)〈訳〉飯とともに食べる汁。女性語」とあり、かつての京都語オツケが小松にも伝わって汁ものでも主に「みそ汁」を指して使われているわけです。

汁ものを指す方言オツケは、小松だけでなく、北の東北地方から、関東・中部・北陸・近畿・中国・四国・九州と全国の広い範囲に分布します。

ちなみに、みそ汁の丁寧な言い方の「おみおつけ」は、「おつけ」にさらに「み」と「お」が加わった形です。

連載 189

小松方言の語源 その14  
— 京都語由来のオヤケ、カンシヨ —



「カンシヨはもう見んようになったなあ。あ、現代のカンシヨ、あった!」(すわまへ芭蕉公園にて)

今年もまた師走を迎えました。「小松方言の語源」シリーズもかなり回を重ねてきましたが、今しばらく続けたいと思います。

今回は、家に関するある二つの方言、オヤケとカンシヨについて、かつての中央語(京都語)との関連をご紹介します。

オヤケは「大家・大宅」から

小松の方言でオヤケというと「お金持ち、財産家」のことを指します。オヤケは、現代語の「公」と語源を同じくする古語(京都語)の「おほやけ(大家・大宅)」に由来する方言です。古くは「大家・大宅」、つまり「大きい家、第一の家の意味だったものが、平安時代には皇居、天皇、朝廷も表すようになり、さらに現代語と同じ「私に対する」公共、公」の意味に変化したと考えられています。ということとは、小松方言で「お金持ち、財産家」の意味で使われるオヤケは、「おほやけ」本来の意味を残しているということになるでしょう。

『日本方言大辞典』(小学館)には、「資産家。素封家」の方言「おやけ」の分布域が、青森県、秋田県、石川県河北郡、福井県、奈良県南部、沖縄県宮古島とあります。また、文献例として、中世末期の狂言にある「去ながら、こなたはおほやけな事でござれば、少し斗は出たのが無いと申事は御座るまい」の例を載せています。

カンシヨは「閑所」から

小松の方言でカンシヨとは「便所」のことです。「便所」でも、屋外にあった大使用の便所小屋を主に指したようです。本連載の2006年1月号(94回)、2007年10月号(115回)でも簡単に取り上げたことがあります。

カンシヨは、古い漢語「閑所・閑処(かんしよ)の読みも」に由来します。元は文字通り「人気がない、静かな所」を指しましたが、中世後期には「便所」の意味でも使われるようになったようです。中世末期の京都語を記録した『日葡辞書』(1603-04)には、「Canjo(カンシヨ)〈訳〉便所」と出ています。このカンシヨが小松にも伝わったと考えればいいでしょう。全国的には、カンシヨの形で方言として使用している地域が多く、小松のようにカンシヨと言つのは『日本方言大辞典』によれば、石川・富山両県の範囲だけのようです。

連載 190

小松方言の語源 その15  
—京都語由来のガンドの二つの意味—



「ブリオコシが鳴って、今年もうまそなガンドがあがった」

新たな年、2014年を迎えました。気持ち新たに本連載の執筆に臨んでいきたいと思いますが、テーマは今しばらく「小松方言の語源」で続けていくことにします。

正月の祝い魚「鰯」の呼称ガンド

北陸を代表する魚「鰯」は、成長につれて呼び名が変わる出世魚ということであ

成長していく様子を子どもの成長に重ね合わせて、縁起が良い魚として正月の祝い魚としても珍重されます。北陸地方では嫁いだ娘の夫が出世するようにとの願いを込めて、お歳暮に鰯を一本丸ごと贈る習慣も根強く残っています。

成長とともに変わる鰯の名前は地方によっても違いがありますが、小松を含む石川県内では、小さいものから順に、「ソクラ(15センチ程度)↓フクラギ(40センチ程度)↓ガンド(60センチ程度)↓ブリ(60センチ以上)と呼ぶのが一般的です。

このうちフクラギは、形や大きさがちよつと足のふくらみはぎ(脹脛)に似ているところから生まれた方言的呼称と思われるのですが、60センチ程度のものを言うガンドは、かつての中央語(京都語)に由来すると考えられます。ではその語源は何かというところ、強盗(竈灯)提灯の略称としての「がんどう」と考えられます(強盗を「がんどう」と読むのは漢字音で言うところの唐音読みで「竈灯」はその当て字とされています)。

「強盗提灯」とは、かつて盗賊が夜に

使った、銅板やブリキ板で作った釣鐘型の丸くて長い手揚げ提灯のことで、その「がんどう」と形や大きさが似ていたため、北陸地方では60センチ程度のものをガンドと呼ぶようになり、さらに最後の長音が落ちてガンドとなったと考えています。

「鰯」の方言としてのガンド、ガンドー

ところで、小松の方言には、鰯の呼称としてのガンド以外にも、もう一つガンド(ガンドー)と呼ばれるものがあります。そして、このガンド、ガンドーも同じく「強盗」が語源と考えられています。『日本国語大辞典 第二版(小学館)』では「強盗の説明の最後に鰯の方言ガンドーを、『日本方言大辞典(小学館)』でも「がんどー」の見出しの下に「強盗」の漢字を当てています。歌舞伎の大道具「強盗返」を作るときの道具に「鰯」があることと関連があるのかもしれない。

連載 191

小松方言の語源 その16  
—京都語由来のキョクナ、キョクナ—



「このねんね、ほんとにキョクナ子やわ」

今回は小松市内の広い範囲で使われる形容語の方言の中から、これまで同様、かつての中央語(京都語)由来のものと、キョクナとキョクナの2語を取り上げることにします。

キズイナは漢語「氣随」に由来

小松方言で「愛想がなく、つんとした様子」を表すキズイナは、かつての中央語

で漢語の「氣随」に由来すると考えられます。

文献例としては、中世末期の京都語の記録した代表的文献の一つである『日葡辞書』(1603~04に「Ozi」キズイ)〈訳「気ままで思ひのままであること」とあり、他の文献例からも、かつての中央語としては「わがままなこと。勝手気ままなさま」を表していたと考えることができます。また、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、中央語本来の意味と同様の意味で、宮城県、新潟県佐渡、鳥取県、島根県、山口県、香川県、愛媛県の使用例が載っています。

この漢語「氣随」が、小松を含む石川県及び富山県の範囲にも伝わり、方言となる過程で形容語化し、「無愛想なさま。つんとした様子」といった意味に変化したと考えられます。

キョクナのキョクは「曲」から

キョクナという方言は、小松では「ひょうきんな。こっけいな」といった意味で使われています。

キョクナのキョクは「曲」に由来するものと思われま。古くは、中世の京都語として「直」の反対語の「曲がっていること。正しくないこと」を指していたものが、その後「おもしろみ。興味」といった意味でも使われるようになったようで、前出の『日葡辞書』には、「Oioionn(キョクノ)ウ〈訳「笑いをひきおこすよつなことや冗談をいう」とあります。小松方言のキョクナは、『日葡辞書』に載るような意味の京都語が北陸に伝わり、形容語化したものに違いありません。となれば、北陸だけでなく西日本のどこかでもキョクナという方言が使われていたと推測されますが、『日本方言大辞典』には「きよく(曲)」の見出しで「こっけいなこと。また、そのさま。」とあり、その使用地域として「石川県能美郡、江沼郡」とだけ出ていますから、かつての中央語「曲」が方言キョクナの形で使用されていたのは、小松周辺(旧能美郡及び旧江沼郡の範囲)に限られている可能性もあります。

連載  
192

小松方言の語源 その17  
—コシキダの語源と京都語由来のゴネル—



「コシキダは冬場の必需品やったなあ」

今年は何年になく雪の少ない冬でしたが、かつて雪の生活に欠かせなかった道具に木製の雪かき具「コシキダ」がありました。今回はそのコシキダの語源について私見を述べるとともに、これまで同様、京都語由来の方言の例として「死ぬ」意味の「ゴネル」を取り上げることになります。

### 「コシキダ」の「コシキ」は「掻鋤」から

上の写真のような形の木製雪かき具を小松では「コシキダ」と言いました。最近ではプラスチック製のスコップや様々な除雪具に追いやられて、目にすることもなくなりりましたが、木製で瓦を傷めにくいので屋根雪下ろしに重宝したものです。東北から北陸にかけての日本海側の積雪地帯では、木製の雪かき具にカイスキ、カイスキ、カスキ、カシキ、ケシキ、ケシキ、カイスキ、カイスキ、カイスキ、カイスキ（以上は青森から山形にかけて）、クシキ、コイスキ、コイスキ、コイスキ、コイスキ、コイスキ、コシキ、コシキ、コシキ、ゴイスキ（以上は新潟から北陸三県にかけて）など、多彩な方言形が聞かれました。江戸時代後期に新潟県魚沼の雪国の生活を描いた『北越雪譜』には「幾万斤の雪の重量に推せんをおそるゆるゑ、家として雪を掘らざるはなし。掘るには木にて作りたる鋤を用ふ、里言に「こすき」といふ、則木鋤なり。」（傍点筆者）とあり、「コスキを「木鋤」からと書いていますが、東北地方の呼称から考えると、「コスキ」は「雪を掻く鋤」つ

まり「掻鋤（カイスキ）」からの音変化形と思われる。小松の「コシキダ」の「コシキ」も、このコスキの変化形で、「コシキダ」はおそらく、その「コシキ」に「イタ（板）」を加えた「コシキイタ」が変化した形だろうと考えています。

### 「ゴネル」はかつての中央語（京都語）由来

小松で「死ぬ」意味で使われることのある「ゴネル」は、かつての中央語に由来するものです。『日本方言大辞典』（小学館）によれば、「死ぬ」の意味の「ゴネル」は、北は東北の秋田や関東地方、長野・静岡・愛知などの中部地方、そして新潟や石川の加賀地方、さらに近畿地方から中国、四国、九州地方にも分布が見られます。江戸時代（1700年代前半）の上方語文献の浄瑠璃作品などに用いられた例も見られます。小松では「ゴネル」のほかに、「ゴネル」から派生したと思われる「ゴネムク」も「死ぬ」意味で使われることがあります。

連載  
193

小松方言の語源 その18  
—京都語由来のカシクと江戸語由来のコッパイナ—



「春なんに、米カシトルとまだ手え冷とておれん」

本連載は今月からいよいよ17年目に入ります。今後とも「愛読下さい」。

今回は、小松方言の中から、かつての京都語由来の「カシク」、そして江戸語由来の「コッパイナ」の2語を取り上げます。

### 「カシク」は古代日本語の「かしく」に由来

本連載の75回（2004年6月号）でも簡単に紹介した「米を研ぐ」意味の方言カ

シク（カシクとも）は、南の加賀市から福井県の嶺北地方でも使われますが、その語源は古代（奈良時代）の中央語にまで遡るとも歴史の古いことです。

『日本国語大辞典 第一版』（小学館）によれば、「かしく」の発音で古くは奈良時代の日本書紀（720年）に「復、つかはるる民有りて、路頭に炊（か）しき、はむ、万葉集（8世紀後半）に「甌（こ）しき」には蜘蛛の巣懸きて、炊炊（か）しく、事も忘れて（山上憶良）」の例が見え、この時代には小松方言のように「米を研ぐ」意味でなく「米を蒸す」意味で、さらに後には「米を炊く」意味で使われたことが分かっています。発音もカシクのほかに、江戸時代の途中からカシクの発音も現れたようです。方言としては、八丈島の「蒸す・ふかす」、青森県津軽地方や秋田県の一部の「飯を炊く」のように原義に近い意味で使われているところもあるようですが、福井の嶺北地方から小松などの加賀南部にかけては、「米を炊く」前の「米を研ぐ」行為を表すように意味が変化したと考えればいいでしょう。

### 「コッパイ」は江戸語「骨灰」に由来

小松の方言で「始末がつかない散々なさま」の意味で使われた「コッパイナ」は、コッパイの「コッパイ」は、18世紀後半以降の江戸語文献に登場する、「さんざん目にあうこと。大変なこと」の意味の「骨灰」（粉灰の表記もあり）に由来します。『日本方言大辞典』（小学館）によれば、小松方言と似た意味で使われる「コッパイ」は、北陸の石川、富山西部、福井の若狭地方西部のほか、東北の岩手県南部や関東地方、新潟、長野、愛知、滋賀、和歌山などに分布することがわかります。そして、近畿地方より西に「コッパイ」の分布が見えないことは、この語が江戸語由来で、江戸時代半ば以降に、江戸を中心に東西に分布を広げた可能性を示すものかもしれません。

連載  
194

小松方言の語源 その19  
—京都語由来のシャモメル、ジロ—



「魚をジロで焼くとてんぽにうまいげん!」

今回も、かつての中央語(京都語)由来の小松方言をご紹介します。

一つは小松市全域で使われるシャモメル、今一つは市東部の山間部集落にのみ分布が見られるジロを取り上げます。

シャモメルは「精(が)もめる」から

シャモメルは「腹が立つ」に近い意味です。小松市内のほぼ全域で使われるよう

です。発音が変化したため想像しにくいかもしれませんが、シャモメルの元の形は「精がもめる」だと考えられます。「精がもめる」の形での中央語の文献での使用例は見当たりませんが、「気力」を表す「精」という中央語をもとに、現代共通語でも用いられる「気もめる」に似た表現として、小松をはじめ、石川・富山両県の旧加賀藩領域で使われるようになったものでしょう。意味も「腹を立てる」のほかに、原義に近いと考えられる「気もめる、いらいらする」の意味で使われる場合もあるようです。

小松市内では、シャモメルに近い表現でセーモム(年齢の高い人にはシエーモムの発音も)が聞かれます。セーモムも「精もむ」でしょう。発音の変化が進んだシャモメルに比べて、「腹を立てる」の意味より、原義に近い「いらいらする」の意味で使われることが多いのではないかと予想されます。

ジロとは「地炉」や「囲炉裏」のこと

ジロとは「囲炉裏」を指す方言形です。

連載  
195

小松方言の語源 その20  
—京都語由来のセゴ、スノイ—



「お父さんのセゴって大きいなあ」

今回も引き続き、かつての中央語(京都語、上方語)由来の小松方言をご紹介します。

取り上げるのは、「背中」の意味のセゴと「悪がしこい」の意味のスノイです。

セゴは近世上方語「背甲」に由来

身体部位の名称は学校教育などの影響で共通語化が進んでいますので、最近で

はあまり使われなくなっていると思われるですが、かつて市内の比較的広い範囲で使われていた方言に「背中」を指すセゴがあります。

『日本国語大辞典 第二版』(小学館)によれば、近世初期の上方語文献である近松門左衛門作「浄瑠璃」曾我会稽山(1718年初演)に「せごうのはげたる盗人鹿、物構の柵をくぐる所を、大せいおり合生捕て候とひつすゆる」のような使用例が見られ、セゴが「背中」の意味のかつての中央語「せごう」(漢字は「背甲」)に由来することは明らかです。それが北陸に伝わった後、小松ではセゴの末尾長音が脱落してセゴとなったものでしょう。

「背中」の意味の方言で元のままの形であるセゴを使う地域は、富山・石川の一部や岐阜県飛騨、西の鳥取、島根、愛媛などに見られます。また、石川県内でも、本来の「背中」の意味が変化して、「亀の甲羅」や「病気で背中が丸くなった人」の意味で使う地域もあるようです。

こちらも、かつての中央語の文献での使用例は見当たりませんが、漢語「地炉」に由来するものと考えられます。しかし、小松の皆さんでも、ジロという方言形を使ったり、聞いたりした人は少ないでしょう。なぜなら、小松市内のほとんどの地域では、「囲炉裏」のことをイリリと言っているからです。ジロは、小松では大杉・丸山・花立といった南東部の山間地ですが聞かれません。白山市の旧鳥越村から旧白峰村にかけての白山麓一帯にも分布していることから、イリリより古い方言形と考えられます。「囲炉裏」を指すジロは、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、小松を含む石川県加賀地方南部以外に、東北の岩手・秋田・山形の一部や関東地方の一部、長野、新潟や福井、そして九州の熊本・宮崎・鹿児島などでも使われていたことがわかります。

一般家庭から囲炉裏が姿を消した今、ジロなどの方言形も忘れ去られようとしています。

スノイも近世上方語「すこい」に由来

「悪がしこい」の意味の方言スノイも、同じような意味の「すこい」が江戸時代初期の浮世草子などに使用例が見えることから、近世上方語由来の方言と考えられます。筆者たちが1996年から5年間実施した市内全域の方言調査では残念ながら聞けなかったのですが、小松でかつて発行された町史類で、『浜佐美町誌』(昭和49年)と『町誌 光谷 第一号』(昭和61年)に「悪がしこい」の意味のスノイが載っています。南の福井県でも使用例が確認できます。

浜佐美は西の海岸部の加賀市との境にある町、光谷は逆に市東部の西尾地区、旧鳥越村との境にあった町(昭和38年の豪雪により大きな被害を受け、翌年全世帯が移住し無住地となった)で、市の周辺地域に分布することから、今ではほとんど使われなくなっていることと合わせて、小松の「悪がしこい」の意味の方言では比較的古い形と思われる。

連載  
196小松方言の語源 その21  
―ダンナイとテナワンの語源「足擦りむいとらんか  
「うん、ダンナイよ!」

かつての中央語(京都語)由来の小松方言の紹介もだいぶ回を重ねてきましたが、今回は「大丈夫だ。差し支えない」といった意味の方言ダンナイと「手に負えない」の意味で使われるテナワンを紹介します。

## ダンナイは「大事な」が語源

「大丈夫だ。差し支えない。構わない。心配ない」などの意味で使われるダンナイは、かつての中央語(京都語)で中世末期

の文献例が見える「大事な」が語源です。

『日本方言大辞典』(小学館)によれば、小松と同じようにダンナイが使われる地域は、新潟県南部から富山・石川・福井の北陸三県、愛知・岐阜から近畿地方、さらに中国地方から四国の徳島・香川の広い範囲にわたります。その分布域からも、かつての中央語が近畿の周辺に分布を拡げたことは明らかです。

これらの地域のダンナイは「大事な」が地方に伝播する過程でダンナイに変化したのではなく、「だんない」の形が中央語文献にも見られることから、中央でダンナイに変化した後に北陸を含む周辺地域に伝播したと考えられます。小松では、ダンナイがダンネーを経て変化したと考えられるダンネの形も聞かれます。ちなみに、北陸三県では、石川・富山はダンナイが優勢、福井の嶺北地方はダンネが優勢です。福井では、それをタイトルに使った「だんね〜ざ〜福井弁の唄」という福井満載の歌がYouTube上で話題になっています。

## テナワンは「手に合わん」から

「手に負えない」の意味のテナワンは、かつての中央語の文献例については、はっきりしませんが、その語源が「手に負えない者」の意味の「手に合わず」に由来する「手に合わん」であることは間違いのないと思われまふ。「テナワズ」系の方言は福井の嶺北地方の一部のほか、中国地方の鳥取・島根両県に分布しますが、それからの変化形テナワン(「手に合わず」↓「手に合わぬ」↓「手に合わん」)がテナヤワン(白山麓の白峰方言や福井の嶺北地方の一部などで聞かれます)を経て変化したと考えられるテナワンは主に北陸三県に分布します。利口で聞き分けがよい子をカタイ子と言いますが、テナワanziはその反対で、言うことを聞かずに手に負えない子ということになります。

連載  
197小松方言の語源 その22  
―京都語由来のドクシヨナとエンゾー「ボールどこいつてんる」  
「あつ、エンゾーにあるや!」

今回もまた小松方言の語源について考えます。取り上げるのは、いずれもかつての中央語(京都語)に由来すると考えられる、「性格が悪い」ことを指すドクシヨナと「(道路脇の)側溝」を指すエンゾーです。

## ドクシヨナは「毒姓」から

小松全域で使われたドクシヨナは、人の性格の悪いさま、意地の悪いさまを言う方言です。語源はかつての中央語(京都語)文献にも登場する漢語「毒性」と考え

られます。

『日本方言大辞典』(小学館)を見ると、同じ意味のドクシヨナーが使われる地域として、石川県をはじめ、滋賀、京都、大阪、兵庫(淡路島)、和歌山(海草郡・伊都郡)、徳島が載り、小松と同じドクシヨナが使われる地域として、奈良(南大和)、和歌山(白高郡)が載り、これらの分布地域からも、ドクシヨナーが、かつての中心地・京都から近畿地方やその周辺部に分布を拡げたものと考えて間違いないでしょう。

## エンゾーは「井溝」から

エンゾーとは、道路脇の側溝、つまり一般的な共通語で言うところのミソやドブを指す方言です。小松では同じような側溝を指す方言として、ドブソも聞かれます。

このうちエンゾーは、平安時代末期の古辞書『色葉字類抄』に「井(イ)」の形で出ている「井溝」が変化した形と考えられます。イミソ→エミソ→エンゾーのような変化です。『日本方言大辞典』を見ると、元形のイミソが岐阜、愛知、静岡に、ほかに、イン

ゾが新潟、富山、石川、福井に、エミソが新潟、岐阜(飛騨)、石川、島根に、そしてエンゾーが富山、石川に分布することがわかります。なお、エンゾーについては、筆者も郷里の福井県越前市で使っていた方言で、嶺北地方の広い範囲で使われています。

一方、ドブソは、かつての中央語との関係は不明ですが、明治維新直後に成立した「加賀なまり」という方言集にドボス、ドスポの見出しで、「悪水溝をこう言う。他の地方には通じない。東京ではドブと言ふ」のように書かれていることから、金沢辺では江戸時代後期にはドボスという言い方があったことがわかります。小松のドブソは、そのドボスの音変化形として生まれた共通語のドブの影響も受けて、可能性が高いと考えています。

連載  
198小松方言の語源 その23  
— 京都語由来のネマル —「窓開けてネマつとると気持ちいいなあ」  
「そうやねえ」

今回も引き続き、小松方言の語源について考えます。取り上げるのは、かつての中央語(京都語)に由来すると考えられる「座る」の意味のネマルです。

小松では、ネマルは「あぐら」も「正座」も含んで「腰を下ろす」こと全体を指して使われるように思いますが、単に「座る」というよりも「ゆったりと座る」「ニユアン」があるので、どちらかと言えば「あぐら」

ら」を指して使われることが多いように思います。

## 芭蕉の俳句にも登場するネマル

涼しさを我侘(わがやち)にしてねまる也

これは松尾芭蕉が「奥の細道」の旅で、旧暦の元禄2年5月17日〜27日(現在の7月上旬)に、山形県の尾花沢に滞在した際に詠んだ有名な句です。この俳句の「ねまる也」の動詞「ねまる」については、従来から、「くつろいで楽に座る」の意味と、「寝る」の横になつてくつろぐ」の意味の二通りの解釈がありました。そこで中央語も含めて、ネマルの意味と方言の分布地域について見ることにします。

『日本方言大辞典』(小学館)では、ネマルは、「座る」の意味で北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、新潟、富山、石川、福井、岐阜、奈良、島根、「あぐらをかく」の意味で岩手(九戸)、新潟(佐渡)、長野(下伊那)、岐阜(北飛騨)とあり、一方、「寝る」の意味で、奥羽、宮城、新潟(北蒲原・東蒲原)、長野(北安曇)、岐阜、島根、長崎、鹿児島も挙がっていて、「座る」と「寝る」の両

方の意味が見られます。また、『日本国語大辞典 第二版』(小学館)によれば、中央語の「ねまる」には、「どじこもる。蟄居する。黙座する」。「すわる。しゃがむ」。「くつろいで休む。そこにとどまる。逗留する」。「寝る」などの意味の用例が見られ、「座る」の意味の使用例は室町時代後半の古辞書や江戸時代初期の上方語文献などに見られます。以上のことから考えると、芭蕉の句の「ねまる」の意味は、芭蕉自身が使っていたネマルか山形方言のネマルかによっても解釈が違ってきそうです。

ところで、北陸三県から新潟以北の東北地方に広く分布する「座る」の意味のネマルは、近畿地方からまず北陸に伝わり、その後東北の日本海側を海上伝播により北上した可能性が高いと考えられます。また、「寝る」の意味については、ネマルのネを「寝る」のネと解釈して「マルは」高まる「深まる」「奥まる」などの「くまる」と同じような動詞化接尾辞と解釈して、「生まれたのかもしれません」。

連載  
199小松方言の語源 その24  
— 京都語由来のカタイとハシカイ —「お茶をどうぞ」  
「あら、小さいのにカタイ子やあ」

今回は、かつての中央語(京都語)由来の形容詞の方言を二つ取り上げたいと思います。

一つは「利口」で聞き分けがよい、「素直」で言つことをよく聞く真面目なといった意味で使われるカタイ、今一つは似た意味の「賢い」、あるいは「ずる賢い」とか「すばしい」といった意味で使われるハシカイです。

## 中央語「かたい」の意味が伝播途中に変化

小松でカタイという方言は、共通語と同じ意味のほか、「カタイ子」とか「カタイ者」のように、「人の言うことをよく聞く利口な子」なども「素直がよくて身持ちの堅い」人などに対して使われます。中央語としての「かたい」(古くは「かたし」)は「堅」や「固」の字が当てられるように、「しっかりと」して崩れない。堅固だ。丈夫だ。といった意味や「厳しい」「堅苦しい」といった意味を表す語ですが、それが北陸に伝わり、方言化する過程で、小松を含む石川県と富山県(旧加賀藩域)では「考え方や行いの固い」ことがプラスの意味に派生し、人の堅実さや利口さを表す形容詞として使われるようになったと考えられます。

同じカタイでも、筆者の出身地である福井県の方言では、共通語と同じ意味のほか、かつての中央語の「かたい」の意味にも含まれていた「丈夫だ」の意味が少し変化し、とりわけ「体が」頑強だ、丈夫

だ、健康だ」の意味で使われることが多いのが特徴です。「カタイ子」と言っても、石川では「利口な子」、福井では「丈夫な子」と、意味が異なるので注意が必要です。

## 近世語「はしかい」が意味変化

小松の方言でハシカイというと、カタイに似て「賢い」の意味で使われるとともに、「ずる賢い」とか「すばしい」の意味で使われることもあるようです。中央語「はしかい」は近世初期の井原西鶴の「嵐無常物語」(1688年)などに「敏捷だ。すばしい」の意味の例が見えますので、小松のハシカイの意味の中では「すばしい」が中央語の意味を引き継いでいるものと言えるでしょう。しかし、これも中央語「はしかい」が北陸に伝播する過程で、北陸三県共通に「すばしい」ことがプラスの意味にも拡大し、すばしさから、機転がきくこと、つまり「賢い」の意味でも使われるようになったと考えられます。

連載  
200

小松方言の語源 その25  
—京都語由来のアグチとチャット—



「ちよっこしお腹空いたね」  
「チャット作れるお茶漬けなんてどうや」

本連載も今回でついに区切りの200回となりました。今後市民の皆さんに興味を持って読みただけできるよう内容も工夫しながら、少しでも長く続けていければと思います。

さて、今回も引き続き、かつての中央語(京都語 由来の方言から、「胡座」を指すアグチと、「早く」の意味で使われるチャットをご紹介します。

アグチは「開口」から変化

共通語「あぐら」の普及で、最近では小松市内でも高年齢世代でわずかに聞かれる程度となったアグチですが、以前は市内全域の広い範囲で使われていました。

江戸時代唯一の全国方言集として知られる越谷吾山『物類称呼』(1775)安永4(年刊)には、使用地域が「加賀」とある方言が57語載っていますが、その中にアグチに変化する前の形と思われる「あいぐち」がすでに載っています。「あいぐちかく」即ち「ゆるやかに坐する事」とあります。

「あいぐち」とは、足袋などの足を履き入れる口を指す、かつての中央語「開口(あきくち)」が変化した形です。その「あきくち」の部分を変換して足を組んで座るところから「あきくち(かく)」と言うようになり、その後、石川に伝わる過程で「あいぐち(かく)」に変化し、さらにアグチ(カク)に変化した、つまり、アキクチ↓アキグチ↓アイグチ↓アグチのように変化したと考えられています。

チャットは中世末期京都語

小松方言の副詞の一つであるチャットは、『日本国語大辞典 第二版』(小学館)によれば、中世末期から江戸初期の中央語資料、例えば『日葡辞書』(1603-104)に「Chatto(チャット)〈訳すばやく〉とあります。こうした中央語の「ちやつと」が伝播したものと考えられます。

また、「はやく」の意味の方言チャットは、『日本国語大辞典』(小学館)によれば、北海道、青森県、秋田県、山形県、新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、静岡県、愛知県、岐阜県、三重県、京都府、大阪市、奈良県、和歌山県などに分布が見られ、その分布状況は、かつての中央語が周囲に分布を広げたこと、中でも北海道、東北地方、新潟には北陸を経由して海上伝播で日本海側を北上したことを示していると考えられています。

連載  
201

小松方言の語源 その26  
—京都語由来のイシナとイブル—



「イブルってあげると気持ち良さそうに寝るね」

今回も語源シリーズを続けることにします。

今回取り上げるのは、「石」の意味のイシナと「揺する」の意味のイブルです。いずれもかつての中央語(京都語 由来の方言)です。

イシナは古語「石子」の下略形

「石」のことをイシナという方言は、『日

本方言大辞典』(小学館)によれば、小松だけでなく、北陸三県と新潟・山形、岐阜・愛知、そして近畿地方に分布が見られます。筆者も金沢での普段の生活では使いませんが、今でも郷里の福井県越前市に帰省したとき、道端の石を見ると自然にイシナという方言が口をついて出てきます。

ところで、このイシナは、さらにさかのぼると、かつての中央語(京都語)イシナにたどり着きます。中世時代の文献に「石」の意味で登場する「いしなご」は「石な子」、つまり「石の子」の意味です。イシナはこの「いしなご」の「い」が落ちた形です。「いしなご」はほかに、「石」の意味より古いと思われる「お手玉」の意味で使われた文献例も見られ、「お手玉」の方言としてのイシナは、奥能登や福井の一部を含めて全国に点々と分布が見られます。

イブルの語源は古語「ゆるる」

「揺する」の意味のイブルも小松だけの方言というわけではなく、『日本方言大辞典』によれば、北陸三県で広く使われるほか、長野県伊那地方や島根県での使用例

が見えます。

アイツア イスニ スワルト アシ  
イサブツテバツカリ オル(あいつは、椅子に座ると足を揺すってばかりいる)のように使われます。そして、このイブルもまた、かつての中央語(京都語)に由来する方言と思われる。

鎌倉時代の語源辞書『名語記』(1275年)には「ゆるる」が「揺する」の意味で載っており、この「ゆるる」の語頭の「ゆ」が「い」に変化した形が「いぶる」だと考えられます。さらに、中世末期の中央語文献には「いぶる」の例も見えますので、この「いぶる」が北陸に伝わって、方言として使われるようになったに違いありません。

ところで、JR北陸本線が小松市から加賀市に入ってすぐの加賀市動橋町にある駅「動橋」。難読地名(駅名)の一つとされていますが、この「いぶり」も「揺する」の意味の方言イブルの連用形にあたるものと考えています。

連載  
202

小松方言の語源 その27  
—京都語由来のヨンベとハッ  
シヤグ—



「ヨンベの大雪で車埋まってしもたわ」

明けましておめでとつございます。今年(ことし)は未(いま)の年(とし)といふことづく(ひつじ)「羊(ひつじ)にまつわる方言の話題でもと思いましたが、羊はもともと日本ではなじみなかった動物なので、残念ながら方言の話題もありません。というわけで、今回も語源シリーズとして、かつての中央語(京都語)由来の方言ヨンベ(「昨晚」の意味)とハッシヤグ(「乾く」の意味)を取り上げま

す。  
「ヨンベは古語「ゆふべ」に由来

小松市内で広く聞かれるヨンベ(ヨンベ)は古語「ゆふべ」(平安時代後半には「ゆふべ」に変化)に由来すると考えられます。「ゆふべ」は中央語では、すでに奈良時代から使われていたが、元々は「日暮れ時、夕方」の意味でした。それが、後に「昨夕。昨晚」の意味で使われるようになり、発音も「ゆふべ」のほか、紀貫之の「土佐日記」(935年頃成立)などには「よんべ」の形も見えます。

国立国語研究所編『日本語地図』(1957〜64年度)にかけて全国2400地点で60歳以上の男性を調査で「昨晚」の方言の全国分布を見ると、ヨンベは北陸三県と岐阜県北部、近畿地方の一部と中国地方の日本海側、四国地方の一部と九州地方の福岡、大分、宮崎などに分布しています。近畿地方や中部地方、中国地方西部にはヨンベの分布も見えませんが、小松のヨンベは、かつての中央語地域から伝わったヨンベがヨンベに変化し

たか、最初からヨンベの形で伝わったかのいずれかでしょう。  
ハッシヤグは中央語「はしやぐ」に由来

ヨンベと違って、最近ではあまり聞かれなくなっていると思われませんが、小松では「乾く」の意味でハッシヤグという方言も使われました。「子どもなどが元気に騒ぎ回る」意味の共通語「はしやぐ」とは無関係で、ハッシヤグは「乾燥する。乾く」の意味のかつての(中世末期から江戸初期にかけての)中央語「はしやぐ」に由来するものです。『日葡辞書』(1603〜04年)に「Faxigui(ハッシヤグ)」の例、浮世草子・立身大福帳(1703年)に「取おきがわるければ、葉がはしやいでくだけ」の例が見えます。この「はしやぐ」が石川に伝わったものに違いありません。ハッシヤグの形は石川のほか、新潟県佐渡、岐阜県、近畿地方の一部と四国の香川・愛媛にも分布が見えます。

連載  
203

小松方言の語源 その28  
—京都語由来のベンコナとヘ  
ダルイ—



「いっぱい遊んできてヘダルイやろ。お芋ふかしといたよ」

今月も引き続き、かつての中央語(京都語)由来の小松方言について見ます。今回は、ベンコナ(「賢い。口が上手な。生意気な」などの意味)とヘダルイ(「空腹だ。ひもじい」の意味)を取り上げます。

ベンコナは漢語「弁口」に由来

小松の比較的広い範囲で使われた方言ベンコナは、先にも書いた通り、「口が上

手な」生意気な」の意味で使われることもありますが、主には「賢い」の意味で使われていました。ベンコナは、石川県内では小松以外に能登地方を中心に聞かれ、能登では主に「口が達者で生意気な」といったマイナスの意味で使われます。

ところで、このベンコナは、かつての中央語(京都を含む上方語)の「弁口」に由来すると考えられます。江戸時代初期の仮名草子・東海道中名所記(1659年頃に「ことさら弁口才覚あるゆへに」といった使用例が見られ、「口が達者なこと。弁舌が巧みなこと」の意味で使われていることが分かります。おそらく上方語「弁口」が北陸に伝わり、方言化する中で、能登地方では元の意味に近い状態で受け継がれながら、「口が達者なこと。弁舌が巧みなこと」がマイナスのニュアンスを帯びて「生意気な」の意味でも使われるようになったのに対し、小松では、逆に「弁舌巧みなこと」の意味がプラス方向に拡張して「賢い」の意味で使われるようになったと考えられます。

ヘダルイは古語「饑るし(饑るい)」からの変化

「空腹だ。ひもじい」の意味のヘダルイは、小松市内ではヒダルイの形も聞かれ、同じ意味の古語「ひだるし(ひだるい)」に由来します。文献には、例えば中世の説話集「古今著聞集」(13世紀中頃成立)に、「この一両日食物絶えて、術なくひだるく候ふままに」のように登場する言葉です。ヘダルイは、かつての中央語ヒダルイが北陸に伝わり、ヒダルイの語頭のヒがへに変化した形です。ゴハン オソナツタサケヘダルイヤロ(ご飯が遅くなったからひもじいだろ)のように使われます。『日本方言大辞典』(小学館)によれば、空腹だ。ひもじい」の意味のヒダルイは、鹿児島や奄美諸島の例しか見ることができません。小松を含む北陸三県は、古語「ひだるい」の意味と形をよく受け継いでいる数少ない地域と言えます。

連載  
204

小松方言の語源 その29  
— 京都語由来のヨークとヨサリ —



「おかわりください」  
「ヨーク食べて大きくなってね!」

今月14日にはよいよ北陸新幹線が開業。これまでに以上にたくさんのお客が訪れるに違いない。今回はその「たくさん」の意味の方言「ヨーク」と、「夜」の意味の「ヨサリ」を取り上げることになります。いずれも、かつての中央語(京都語)由来の方言です。

ヨークは近世上方語「余計」から

小松市内で「たくさん」の意味で使われる方言には、テカト(尾小屋、安宅など)、デコト(符津など)、デーコ(大杉など)、エツペ(尾小屋、符津など)などのほか、ヨーク(大杉、尾小屋、符津など)も聞かれます。このうち、テカト、デコト、デーコは「でかいこと」、エツペは「いっぱい(一杯)」が変化したものと考えられます。ヨークは、かつての中央語(上方語)で「程度が通常より上であること」の意味で江戸時代以降に使われるようになった「余計」に由来するものです。『日本方言大辞典』(小学館)によれば、「たくさん」の意味の方言「ヨーク」は、富山県、福井県、岐阜県、愛知県、名古屋、三重県、滋賀県、京都府、奈良県、大阪府、兵庫県、和歌山県、島根県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県、長崎県などでも使われることがわかり、江戸時代以降に近畿地方から西日本(北陸を含む)に分布を拡げたものと予想されます。

ヨサリは古語「夜去」に由来

「夜」の意味で使われるヨサリも、小松を含む石川県加賀地方と福井県以外に、岐阜県、三重県、滋賀県、京都府、奈良県、大阪府、兵庫県、和歌山県、島根県、香川県、福岡県、長崎県、熊本県、宮崎県などでも使われることが『日本方言大辞典』からわかり、ヨサリの形も含めると東北の一部や関東地方も加えて、西日本のさらに広い範囲に分布するようです。

ヨサリは漢字をあてると「夜去」です。「さり」は本来「来ること、近づくと」の意味で、「よさり」で「夜が来ること」を表したものと考えられますが、そのうち「さり」の意味が失われ、単に「夜」の意味で使われるようになったようです。有名な清少納言「枕草子」(平安時代中期)にも「十四日よさり、雨いみじう降れば」のように「夜」の意味で登場する「よさり」が、近畿地方から加賀地方にも伝播して小松でも使われるようになったと考えればよいでしょう。

連載  
205

小松方言の語源 その30  
— 「溝」の方言ドブソンの語源 —



「ドブソに落ちないように気を付けてね」  
「は〜い!」

年度が改まり、本連載も今月から18年目に入ります。今後ともご愛読下さい。これからもしばらくは小松方言の語源を取り上げていきたいと思いますが、今後は、かつての中央語(京都語、上方語)に由来するかどうか不明のものも含めて見ていくことにします。

今回は、本連載の197回(2014年8月号)で取り上げたエンゾ(古語「井溝」

ドブソはドボスからの変化

日本テレビ系の人気番組「秘密のケンミンshow」の2014年5月15日の放送で、金沢方言で「溝」を指して使われるドブソが取り上げられ、番組中でその語源について筆者がコメントしたことがあります。

金沢辺りでは、県外の女性に聞かれると誤解されそうなドボスのほか、代表的な言い方にドボス、ドブソ、ドボソなどがあります。小松ではドブソが一般的です。これらの言い方は、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、石川県のほぼ全域と、加賀地方に隣接する富山県西部のごく一部に分布するようで、今のところ、かつての中央語にこれらと繋がりそうな語が見つかっていませんので、石川県に特有の方言と言つてよさそうです。

語源的には、金沢の舞台用語に、役者の顔が見えにくい花道の外側の席を指す

「どぼす」という言葉があったこと(筆者監修の『新頑張りまっし金沢』とは87ページ参照)、明治初年成立とされる『加賀なまり』という方言集に「どぼす、どぼほ」の見出しで「悪水溝ヲ此ク云フコト他方へ通セス東京ニテハ「ドブ」ト云とあることから、既に江戸時代後期には金沢(加賀地方)で「溝」を指す「どぼす」が使われていたことがわかります。「どぼす」の「ほ」と「す」が交替した形と思われる「どすぼ」は聞かれません。

舞台用語のドボスが先か、「溝」を指すドボスが先かは、はっきりしないものの、金沢あたりのドボス、ドボソ、小松のドブソは、いずれもドボスの発音が変化したものだろうと考えています。中でも、小松のドブソと金沢のドボスは、元のドボスが共通語「どぶ」の発音に引かれて変化した、「類音牽引」と呼ばれる現象によって生まれた形だろうと思います。

連載  
206

小松方言の語源 その31  
—京都語由来のメンデとヤク  
チャムナイ—



「のど渴いたんならこのお茶100万円で売ってあげるよ」  
「そんなヤクチャムナイこと言わんと、飲ましてちょうだい」

今回は、かつての中央語(京都語)由来の小松方言として、「醜い」の意味のメンデ、「たわいもない。役に立たない」の意味のヤクチャムナイをご紹介します。メンデについては本連載の140回と141回、ヤクチャムナイについては108回でも取り上げていますが、今回は改めてその語源について考えます。

メンデはメンDOI(面倒い)に由来

小松で「醜い」の意味で使われる方言には、多数派のメンデのほか、メンデー、メンDOI、メンDOIなどがあります。メンDOIという最近の若者言葉でも「面倒くさい」の意味で使われることがありますが、「醜い」の意味の小松方言メンデの語源は、江戸時代初期の上方語文獻(浄瑠璃作品など)に登場する「めんどうい(面倒い)」だと考えられています。

『日本国語大辞典 第二版』(小学館)によれば、「めんどうい」の意味には、①「面倒である。めんどうくさい」と②「みっともない。見苦しい。醜い」の二つがあります。②の意味の「めんどうい」が小松に伝播したものと考えられます。

「醜い」の意味のメンDOIは、北陸の石川・福井のほか、近畿地方、中国地方の岡山・広島・山口、四国地方の徳島・愛媛・高知などにも分布するようです。メンDOIがメンDOIに変化し、メンDOIの「ダイ」[ɔi]の部分が融合・長音化して[ɔ:]となり、メンデーが生まれ、さらに末尾

の長音が落ちた形がメンデでしょう。

ヤクチャムナイは「益体もない」から

「たわいもない。役に立たない」の意味の小松方言ヤクチャムナイは、中世末期から江戸時代初期の京都語文獻、上方語文獻に登場する「やくたい(益体もない)」が語源と考えられます。「益体」が「役に立つ」の意味で、その否定表現にあたります。中世末期の京都語が記録されている「日葡辞書」(1603-1604年)には、「Yacutaimo nai(ヤクタイモナイ)<訳>秩序も調和もない、あるいは何の役にもたないこと」といった例が見えます。ヤクタイモナイが石川に伝播する過程で、ヤクチャモナイ→ヤクチャムナイと変化したものと考えられます。石川・富山ではヤクチャモナイ、ヤクチャムナイが「むちやだ。途方もない」の意味で使われる地域もあります。

連載  
207

小松方言の語源 その32  
—京都語由来のエローとワナ  
ル—



「お腹空いてもワナランと待つとって、偉い子やあ」

歌舞伎のまち小松の初夏を彩るお祭りも終わり、今年もはや6月を迎えました。

今回も、かつての中央語(京都語)由来の小松方言をご紹介します。取り上げるのは、「触る」の意味のエローと「大声を出す。とる」の意味のワナルです。

エローは中央語「弄る」が語源

小松では主にエローの形で用いられませんが、その語源は、中世末期から江戸初期の京都語・上方語文獻に用例が見える「いらう」(漢字は「弄」が当てられます)と考えられます。具体的な文獻例には、「其うへいらふて見ましたればまだ人肌で御座った」(狂言・仏師)、「包みは解くに及ぶまじ、弄うて見ても五十両」(浄瑠璃・冥途の飛脚)、「彼一粒の銀をいろふて見る事幾度か」(浮世草子・好色二代男一三三)などがあります。

『日本方言大辞典』(小学館)によれば、イラウの形で、石川県南部(旧江沼郡)から福井県、そして関西地方から中国・四国地方に、イロウの形で石川県、富山県西部と愛知・岐阜の一部、関西周辺部から中国・四国地方、そして長崎県対馬などに分布していることが分かります。

小松のエローは後者のイロウ(イロー)の語頭のエがエに変化した形です。北陸地方ではあまり使われなくなっていますが、関西地方などでは今も比較的良好に

われています。

ワナルはワメクとドナルの混交形?

「大声を出す。とる」の意味のワナルは、小松市内のほぼ全域で使われています。「ドレダケ ワナツテモ」(「どれだけ大声で呼んでも出てこない」)のように使われます。ワナルの小松市以外の分布については、『日本方言大辞典』によれば、関西地方を中心に、新潟県佐渡、富山県下新川郡、石川県、山梨県、さらに西の鳥取県東部などに分布するらしいことが分かります。

はつきりしたことは分かりませんが、ワナルは元々使われていたワメクとドナルの混交形として生まれた可能性ががあります。江戸時代中期の上方語文獻である談義本「身体山吹色」三に「上張った声で、鉢水持て来ておくれと高声で鉢水取りよせ」のような使用例が見えることから、関西地方で「わなる」の形が生まれた後に、北陸地方など、周辺部に広がったものと思われる。

連載  
208小松方言の語源 その33  
— 京都語由来のエチャケナ —

「あら〜、エチャケナ子やねえ」

5月恒例のお旅まつりに加え、小松市木場湯公園を会場にした第66回全国植樹祭も成功裏に終わり、小松の町もようやく落ち着きを取り戻した頃でしょう。

さて、小松方言の語源シリーズも33回目。今回は、「かわいらしい」の意味の方言、エチャケナを取り上げます。NHK連続テレビ小説「まれ」でも時々登場します。これまで同様、かつての中央語（京都

語）に由来する方言です。

## エチャケナは「いたいけな」に由来

年輩の皆さんの中には、丸々と太って元氣そつな子どもを見ると、ウマソナコヤネーという褒め言葉が口をついて出る方もいるでしょう。ウマソナの語源については本連載の178回です。取り上げましたが、石川・富山以外の人には、「おいしそうな子」と言われていると誤解されがちな方言として、しばしば話題になります。

では、かわいらしい子どもに対しては皆さんは何と言つてでしょう。年輩の皆さんの中には、エチャケナコヤネーと言う方がいるに違いありません。小松ではエチャケナが一般的ですが、石川県内ではエチャケナの形も聞かれます。

エチャケナ（エチャケナ）の語源はかつての中央語（京都語）の「いたいけな」です。『日本国語大辞典 第二版』（小学館）によれば、中世の1500年代の文献「中華若木詩抄」（1520頃）、「運歩色葉」（1548）、「玉塵抄」（1563）などに

用例が見える「幼くてかわいらしいさま。素朴なさま。また、子どもなどのいじらしいさま」の意味を表す「いたいけな」に由来すると考えればよいでしょう。京都から北陸に伝播する過程で、「いたいけな」がイチヤイクナ、そしてエチャケナ、さらにエチャケナと発音が変化したと思われる。

現代語では、「いたいけな」というと、「幼くて、罪がない。いじらしい」といった意味で使われますが、これは古語「いたいけな」の意味の一部が現代の共通語に残ったものです。一方、小松方言のエチャケナは、古語「いたいけな」の意味のうち、現代共通語の「いたいけな」からは消えてしまった「幼くて、かわいらしい」の意味を残したものと考えることができます。『日本国語大辞典』（小学館）を見ると、「幼児などの愛らしいさまを指す方言」いちゃけ「は、富山・石川両県と石川のすぐ南の福井県旧坂井郡に分布することが分かります。

連載  
209小松方言の語源 その34  
— 京都語由来のケナルイとダチャカン —

「スツベスベなお肌、ケナルイわあ〜」

今回も小松方言の語源シリーズとして、かつての中央語（京都語）に由来するケナルイ（「羨ましい」の意味）とダチャカン（「駄目だ」の意味）を取り上げます。

## ケナルイの語源は古語「異なり」

『日本方言大辞典』（小学館）などによれば、「羨ましい」の意味のケナルイは、小松を含む北陸三県のほか、東北地方の秋田・宮城、関東地方、中部地方、近畿地方、中国地方（鳥取・岡山・広島）、四国地方（徳島・

香川・愛媛）といった広い範囲に分布が見られます。同様の地域ではケナリーの形が聞かれることも多く、さらにケナリがこれらの地域の周辺部にあたる東北北部や、新潟の一部、三重・和歌山・香川などに分布するようです。

これらは、古語の形容動詞「異なり」に由来します。「異なり」とは、本来は「普通と変わっている様子。特別にすぐれている様子」を表していたのですが、「普通と違っていること。特にすぐれていること」に対して羨ましいと思う気持ちから「羨ましい」の意味が生まれた後に、発音もケナリからケナリー、さらにケナルイに変化し、京都から周辺地域に広がったものと考えられます。文献では、ケナリーが室町末期の狂言・鉢印に「いつかたもにぎやかなるがけなりうて、はやしをかたらふて、いひ合て出て候に」のように、ケナルイが同じく室町時代の謡曲・輪藏に「そのこと、めでたい折からなればいづれも賑やかなるがけなるうて、囃子を語らうて言い合はせて出て候」のような形で登場しています。

## ダチャカンは「埒あかん」から

小松市内ではダチャカンのほか、ラチャカン、ラツチャン、ダツチャカン、ダチャカンなどの形も聞かれます。こちらは、その形から想像できる方も少なくないと思われるのですが、かつての京都語で、「駄目だ。いけない。役に立たない」の意味で使われた「埒（が）あかん」（「物事がはかどる。きまりがつく」の意味の「埒があく」の否定形）に由来します。こちらも北陸三県をはじめ、北は東北から南は九州までの広い範囲に様々な音声変化形が分布しています。京都方面から「らちあかん」の形で小松に伝播した後に、語頭の「ら」が音声学的に「だ」に近い音であるために、ラチャカン→ラチャカン→ダチャカン→ダチャカンのように変化したものです。

連載  
210

小松方言の語源 その35  
—京都語由来のアゴタとキビス—



「アゴタにご飯粒ついとるぞ〜」  
「え〜?どこ、どこ?」

今年の夏は厳しい暑さが続きましたが、9月になり、ようやく秋らしくなってきました。

今回は、かつての中央語(京都語)由来の小松方言の中から、身体部位の「顎」の方言アゴタと「踵」の方言キビスを取り上げます。

身体部位を表す言葉にも以前は多彩な方言が聞かれましたが、共通語の急速な

普及でその多くが忘れられようとしています。

「顎」の方言アゴタは古語「あぎ」に由来

現在の共通語アゴ、そして小松方言のアゴタはともに古語「あぎ」に由来します。平安時代(10世紀)の古辞書に「髀」の意味の「阿岐」の例がすでに見えます。この「あぎ」が中央語(京都語)で、その後の11世紀頃には「あぎ」と変化した例が文献に見えます。そして、その「あぎ」がさらに「あごた」に変化して(江戸時代の1693年刊『男重宝記』に「あごたは髀也」との記述が見えます)、それが北陸にも伝わったものと考えられます。

「顎」の方言としてアゴタが分布する地域は、国立国語研究所編『日本語地図 第3集』108、109図によれば、北陸では小松市を含む石川県加賀地方の一部と福井県嶺北地方の一部のほか、近畿地方と中国地方の鳥取・島根両県の一部そして九州の福岡県南部などです。ちなみに、共通語のアゴは、アゴタよりも早く文献に登場しており、その分布が関東地方

にまで達していたために共通語となったものです。

「踵」の方言キビスは古語「くびす」に由来

「踵」を意味する言葉は、古くは「くびす」で、それが変化して奈良時代には「くひす」、さらに平安時代には「くびす」となり、室町時代末期の狂言台本などには「きびす」の形が見られるようになります。小松方言のキビスもこの中央語「きびす」が伝播したものと考えられ、方言キビスの分布を前出の『日本語地図 第3集』129図で見ると、近畿地方を中心に東は北陸地方、西は中国地方ほぼ全域に分布しており、「踵」の方言としては新しい分布であることが分かります。東北地方に広く分布するアクト、九州から沖縄にかけて分布するアドの類が最も古い形で、近畿地方の一部から中国・四国地方の一部に分布するカガト、関東地方に分布し共通語にもなったカカトもキビスよりは古い形と考えられます。

連載  
211

小松方言の語源 その36  
—京都語由来のオドリとホーベタ—



「ほっちゃりホーベタの赤ちゃん、まんでかわらしわ〜」

今回も前回に続いて、かつての中央語(京都語)由来の小松方言の中から、身体部位の方言として「ひよめき」のオドリと「頬」のホーベタを紹介したいと思います。身体部位を指す言葉は急速に共通語化が進んでいます、読者の皆さんはこれらの方言が何を指すか分かったでしょうか。

「ひよめき」を指す方言オドリは中世末期京都語

現代共通語では、「ひよめき」という言葉自体あまり使われることがなく、知らない人も多いかもしれませんが、「乳児の時期に前頭部にある骨の隙間の部分」を指す言い方です。小松の方言では、その「ひよめき」の部分をオドリと言います。

オドリとは「踊り」で、骨の隙間が踊るようにピクピク動くところからの名付けと思われるが、決して小松で生まれた方言ではありません。なぜなら、中世末期にキリスト教を広めた日本にやってきたポルトガル人宣教師が、当時の京都語を記録した辞書として知られる『日葡辞書』(1603年)に「ひよめき」を指す「Vodoni(オドリ)」がすでに載っているからです。つまり、少なくとも中世末期には京都で使われていたことが分かるオドリ(歴史的仮名遣いではオドリ)が、北陸(小松)にも伝わったものと考えられます。

「ひよめき」を指す方言オドリは『日本方言大辞典』(小学館)によれば、岐阜県、

奈良県、和歌山県、島根県、山口県、高知県、大分県にも分布するようです。そこには北陸地方の県名は挙がっていませんが、小松に加えて福井県嶺北地方(例えば筆者の郷里の越前市)でも使われていたことが筆者の調査でも確認できています。

「頬」の方言ホーベタは近世初期京阪語「頬柝」

国立国語研究所編『日本語地図 第3集』の「ほほ(頬)」の方言地図(107図)によれば、小松と同じように「頬」をホーベタ(ホーベタも含む)と言うのは、近畿地方と北陸三県と岐阜県飛騨地方に分布し、離れて山口県、福岡県にも分布が見えます。その分布状況から、「頬」の方言としては歴史的に最も新しいものと考えられます。文献では、近世初期の京阪語文献である仮名草子「仁勢物語」(1640年頃)などに登場する「ほおげた」(「仁勢物語」では「ほうげた」の表記)が語源と考えられ、それが北陸地方に伝播する途中、あるいは伝播して後にホーベタに変化したものと考えられています。

連載  
212

小松方言の語源 その37  
—京都語由来のハギシとコブラ—



「コブラがつらんよう、しっかり準備運動するぞ〜」

を指す方言同様、共通語の普及で使う人は少なくなっていると思いますが、小松では「歯莖」を指すハギシという方言形が使われていました。

ハギシは、平安時代中期の漢字辞書『新撰字鏡』に「歯莖」の意味で載っている「齒肉（ハジシ）」の音変化形と考えて間違いないでしょう。シとギは音的に近い音ですから、「ジ」から「ギ」への音の交替が起こったものと思われます。筆者の出身地である越前市（旧武生市）を含む福井県の嶺北地方では、広い範囲で古語ハジシの形のまま方言として使われており、筆者も虫歯で歯莖が腫れたときに、ハジシハレテ イテーンニヤ（歯莖が腫れて痛いんだ）のように言っていました。

「歯莖」の意味の古語「はじし」の「し」は、奈良時代の『万葉集』や平安初期の史書『続日本紀』（797年）などに既用例が見える「肉」主として食用となる獣肉を指したの意味の古語です。一方「歯莖」の意味の「はじし」は、『新撰字鏡』のほか、平安時代中期（930年代）の辞書『和名類聚抄』に「断、波之々々、齒の肉也」、平

「歯莖」の方言ハギシは古語「歯肉」に由来

これまでも取り上げてきた身体部位

安時代末期の説話集『今昔物語』にも「咲へば歯がちなる者の、はじしは赤くなむ見えける」といった用例が見えます。

「ぶくららはぎ」の方言「コブラ」は「脚」から  
小松では「ぶくららはぎ」のことを「コブラ」と言います。「ぶくららはぎ」とは足のすねの後ろのぶくらんだ部分を指します。筆者の手元にある現代語の辞書の二つ『新明解国語辞典 第七版』（三省堂）には「こむら」という項目があり、『ぶくららはぎ』の意の老人語とありますので、共通語でも消えているわけではありませんが、「こむら」は平安時代の『和名類聚抄』に「腓、古無良、脚腓也」の例が見えるような古語です。かつての中央語でも「こむら」の「む」が音的に近い「ぶ」に変化した「こぶら」の例も見えますから、「こむら」が北陸地方に伝播する途中で「こぶら」に変化したのか、中央で「こぶら」に変化した後に北陸に伝わったのかは定かではありません。

連載  
213

小松方言の語源 その38  
—京都語由来のイキリとイトシゲニ—



「イキリで眼鏡が曇ってしまった」

今回は、前回までの身体部位の方言から話題を変え、かつての中央語（京都語）由来の小松方言の中から「湯気」の意味のイキリと、感謝のことは「ありがとつ」にあたるイトシゲニを取り上げます。

「湯気」の方言イキリは中央語「いきり」に由来

最近では、あまり聞かれなくなっている

ると思いますが、小松市内の広い範囲で「湯気」のことをイキリと言っています。このイキリも、小松で生まれた方言ではなく、かつての中央語地域である京都で使われたことばが伝播したものと考えられます。「湯気」の意味の「いきり」は、江戸時代前期の俳諧『玉海集』（安原貞室編 1656年刊）に「いまだとをくはのびじ 落人 道筋にいきりこそたて馬のふん」（傍点筆者）のように登場しています。

また、『日本方言大辞典』（小学館）には「湯気」を指す方言イキリが使われる地域として、小松を含む石川県のほか、富山県砺波、静岡県志太郡、鳥取県西伯郡、岡山市が載り、イキリが京都を中心に、東は石川・富山西部や静岡、そして西の鳥取や岡山にと伝播したことを思わせます。

イトシゲニはキノドクナと同じ発想

小松の方言で聞かれる感謝のことは、北陸三県に共通のキノドクナや金沢を中心に加賀地方で広く聞かれるアンヤトのほか、イトシゲニ（イトシギニも）、シヨツシャナー（シヨリシャノーも）などが

あります。

このうち、イトシゲニは、「かわいそう」の意味の京都語・上方語「愛しげ」に由来し、本来、自分のために気遣いをしてくれた相手をおかしいと思う気持ちを感じたことばとなったもので、北陸地方で広く用いられる感謝のことはキノドクナ（自分に気遣いをしてくれた相手が「気の毒だ」と同じ発想によるものと言えます。福井県の犬山市・勝山市で聞かれる感謝のことは、ヤナコツチャ（相手にとって「嫌なことだ」も同様です。

『日本方言大辞典』（小学館）によれば、「かわいそうなさま。気の毒なさま」の意味の「いとしげ」の使用地域として、富山県東礪波郡、石川県石川郡、同江沼郡、岐阜県飛騨、島根県隠岐島、香川県丸亀市、同小豆島が載り、文献例として、浮世草子『御前義経記』（1700年刊）の「いとしげさうに、伊勢様になんのとかが有る事ぞ」（傍点筆者）という、江戸時代前期の上方語の例が見られます。

最近では、あまり聞かれなくなっている

連載 214

小松方言の語源 その39  
—京都語由来のボコイとワヤク—



「ボコイことしとると子供に笑われっぞ」

明けましておめでとつございます。今年も引き続き本連載をご愛読ください。今年も今しばらく、かつての中央語(京都語)由来の小松方言をご紹介しますと思います。今回は、「まぬけな」の意味のボコイと「冗談」の意味のワヤクを取り上げます。

ボコイの語源は中央語の「おぼこ、おぼこ」

小松で「まぬけな」の意味で使われるボコイは、かつての京都語で「世間知らずのうぶな子、またはそのようなさま」を表した「おぼこ」が形容詞化した「おぼこい」の語頭の「お」を落した形と考えています。この意味での「おぼこ」は、室町時代の辞書『運歩色葉集』(1548年)に「小兒ヲボコ」若子、同、江戸時代前期の俳諧集『西鶴大矢数』(1681年)に「おぼこさうな其君様は時鳥」といった使用例が確認できます。

また、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、「世慣れないで子供っぽい。無邪気だ。幼稚だ」の意味の方言オボコイが愛知県や近畿地方から四国地方に見え、同様の意味でのボコイが石川県金沢市や岐阜県、滋賀県、大阪市に見えます。一方、小松と同じような「まぬけだ。鈍い」の意味のボコイは、石川県福井県、滋賀県、香川県などに見え、「おぼこ」から生じた「世慣れないで子供っぽい。幼稚だ」といった意味

のオボコイが、近畿地方(京都)から北陸などに分布を広げる過程で、ボコイに形を変えるときにも、「まぬけな」の意味を生じたと考えています。

ワヤクは古語「枉惑」が変化

「冗談」の意味の小松方言ワヤクは、「道に外れた事をして人を惑わすこと」の意味で平安時代の『往生要集』(984)985年や『今昔物語』(1120年頃)などに用例が見え、「ずうずうしく、ずるいこと」の意味で『日葡辞書』(1603)1604年に用例が見える「枉惑」に由来すると考えられています。「冗談」という意味との関連を考えると、文献で早く見られる「道に外れた事をして人を惑わすこと」の「人を惑わす」の意味が「冗談」の意味に変化した可能性が高いと思われる。『日本方言大辞典』によれば、「枉惑」から変化した方言ワヤクは、実に多彩な意味に変化しながら全国に分布しています。小松と同じ「冗談」の意味のワヤクは、石川のほか、近畿地方、中国地方、九州地方にも分布します。

連載 215

小松方言の語源 その40  
—京都語由来のヒラガリとムサイ—



「あ〜、腹減った〜! ヒラガリの弁当食べよっさ」

今回も引き続き、かつての中央語(京都語)由来の小松方言の中から二つの方言をご紹介します。一つは「昼食のために帰宅すること」や「昼食時」、あるいは「昼食」の意味で使われるヒラガリ、もう一つは「心配な」の意味で使われるムサイです。いずれも小松市内のほぼ全域で使われた方言です。

ヒラガリは「ひるあがり(昼上がり)」が変化

若い世代では、ヒラガリという発音を聞いても意味が想像できない人も多いでしょうが、本来ヒルアガリ(昼上がり)だったものが、ヒルアのルの母音「」が脱落してヒラガリとなったものです。

「ひるあがり」とは「寺子屋の授業が午前中で終わること。また、正午に授業が終わって家に帰ること」の意味で、近世前期上方語文獻である雑俳や浄瑠璃「平仮名盛衰記」(1739年)などに例が見えます。こうした近世前期の上方語が北陸に伝わる過程で、発音がヒラガリに変化するとともに、本来の意味に近い「昼食のために帰宅すること」のほか、「昼食時」や「昼食」の意味でも使われるようになってきたと考えられます。

小松と似た意味でヒラガリが使われる地域は、東北の岩手県・山形県の一部のほか、北陸の富山県西部、石川県の旧石川郡・能美郡・江沼郡、そして福井県嶺北地方などがあります。筆者も郷里の福井県

ムサイの語源は中世京都語「むさひ」

小松で「心配な」の意味で使われるムサイは、中世後期の京都語文獻に見られる「むさい」に由来すると考えられます。文献例は、①「意地や欲が強くて、心が汚い。卑しい。下品だ」の意味で「史記抄」(1477年)や浮世草子「好色二代男」(1682年)など、②「汚らしい。汚くて気味が悪い。不潔である」の意味で「御湯殿上日記」(1482年)や「虎明本狂言・粟田口」(室町末〜近世初期)などがあります。北陸地方に伝播するうちに意味をずらして「心配な」の意味で用いられるようになってきたものでしょう。また、同じ加賀地方でも金沢市付近で「嫌な」困った、旧石川郡能美郡で「気の毒だ、旧江沼郡で「めんどうだ」の意味のムサイも使われたようです。

連載 216 小松方言の語源 その41 京都語由来の「アワシヤ」とイクス



「後ろに隠しとるもん、こっちにイクソ！」 「やだよ～」

今回は、かつての中央語（京都語）由来の方言として、「間」の意味の「アワシヤ」と「くれる（よこす）」の意味の「イクス」を紹介したいと思います。

2012年11月号（連載176回目）から続けて来た京都語由来の小松方言の紹介も、3年以上経って40回を超え、代表的なものほぼ取り上げたように思いますので、今号で終わりにして、次号（新年度）

からは別のテーマでと思っています。アワシヤは古語「あわい」からの変化か

小松では、物と物の「あいだ（間）」「隙」を指してアワシヤと言うことがありますが、「ツクエト ツクエノ アワシヤ」机と机の間）のように使われます。アワシヤは、「時間的、空間的なものとの間、間隔、すきま」を指し、源氏物語に「几帳もの立てちがへるあはひより見通されて、あらはなり（傍点筆者）のように登場する古語「あわい」に由来すると思われる。『日本方言大辞典』（小学館）によれば、福井県の敦賀や嶺北地方北部にアワイサ、アワサの形が見え、さらにアワサイの形が新潟の佐渡、富山、福井、岐阜の飛騨、滋賀、京都、兵庫、和歌山、島根など、近畿およびその周辺に分布していますので、小松で聞かれるアワシヤは、「あわい」が京都方面から福井を経て伝わる過程で、アワイサ→アワサ→アワサイ→アワシヤのように変化したものでしょうと考えています。

イクスは中世末期京都語に由来

小松の方言で「（人が自分に何かを）くれる」といった意味で使われるイクス（自分に「よこせ」と言う場合の命令形はイクセ、イクソとなります）は、かつての中央語（京都語）の「よこす」が変化した室町時代末期京都語の「いくす」に由来すると思われる。中世末期の京都語文献の一つである「狂言記」の中に「身どもにまいてとってこいとおっしゃられましたほどに、いくさうしやれませい」（傍点筆者）のように登場する「いくす」が見えます。イクスは『日本方言大辞典』によれば、新潟、富山、石川、そして福井の嶺北地方の範囲に分布していることがわかりますから、先の「あわい」と同様、「いくす」が京都方面から伝わったものでしょう。例えば、「キョーワ、ダチャカンドモ、コンダカナラズ、イクスカ（今日は駄目でも今度はずぶくれるか）」のように使われ

連載 217 方言談話資料に見る 小松方言の特徴 その1 大杉町（下大杉町・大杉町）方言の自然談話①



「フレ ソクサイナカー」 「オカゲサンデ。トコロデ フレ アシタ イエニ オルコ」

年度が改まりました。今月から本連載は19年目に入ります。今後とも変わらさずご愛読ください。

さて、連載19年目のスタートにあたり、今回からは新シリーズとして、小松市内の何地点かでの自然談話や場面設定の会話の文字化資料を取り上げ、そこに見られる特徴を見ていくことにしたいと思います。

今回は、物と物の「あいだ（間）」「隙」を指してアワシヤと言うことがありますが、「ツクエト ツクエノ アワシヤ」机と机の間）のように使われます。アワシヤは、「時間的、空間的なものとの間、間隔、すきま」を指し、源氏物語に「几帳もの立てちがへるあはひより見通されて、あらはなり（傍点筆者）のように登場する古語「あわい」に由来すると思われる。『日本方言大辞典』（小学館）によれば、福井県の敦賀や嶺北地方北部にアワイサ、アワサの形が見え、さらにアワサイの形が新潟の佐渡、富山、福井、岐阜の飛騨、滋賀、京都、兵庫、和歌山、島根など、近畿およびその周辺に分布していますので、小松で聞かれるアワシヤは、「あわい」が京都方面から福井を経て伝わる過程で、アワイサ→アワサ→アワサイ→アワシヤのように変化したものでしょうと考えています。

今回から取り上げる自然談話、場面設定の会話の文字化資料は、小松市立博物館の委託で1996年から2000年にかけて実施した小松市内全域での方言調査で得られたものです。その一部は、すでに『小松市立博物館紀要』の33号、34号、36号で報告したことがあります。今号では、『小松市立博物館紀要』33号に掲載の拙稿「石川県小松市大杉谷川流域の方言」で取り上げた大杉町での方言談話の一部を紹介から始めます。

以下の方言談話は、1996年10月2日に大杉町の生活改善センターで収録した、4名の話者（A 大正6年生まれ・男、B 大正4年生まれ・男、C 大正4年生まれ・男、D 大正11年生まれ・女）による会話です。方言談話の文字化にあたっては、無意味な挿入句などは省略しつつ、表音的片仮名表記（文節分かち書き）で示し、適宜（ ）内に共通語訳を付します。なお、小松の高年層方言では、語中のガ行音は原則鼻濁音となりますが、本稿では語頭の破裂音と区別せずに「ガギゲグ」と表記

今回は紙幅の関係でここまでとします。小松方言の特徴についての解説は、来月のこの続きの方言談話の紹介の後にしたいと思います。

- A ダイタイ トシヨリヤサカイ（年寄りだから） ミミア トイモンジャ サカイ（遠いものだから） ジブンノ ユーコトバツカデ（言うことばかりで） テレビト イッシュヨヤ（同じだ）。ヨソノ ヒトガ ナニ シツモンシタカッテ（質問しても） ソリヤ。
- B シランネ（知らないね）。
- C イロンナ ハナシ マジエコジャ（ごちゃ混ぜに） ユーサケナ（言うからね）。
- B ソレコソ ワガ（自分が） イワンナ ンコトダケワ（言わなければならぬことだけは） イワンナント（言わなければと） オモテ（思つて） ユートン ニヤロ（言っているんだろ）。
- C キョーシツミタイナ ワケニワイ カンノヤ（いかないんだ）。アイテト トックミニアツ。

今回は紙幅の関係でここまでとします。小松方言の特徴についての解説は、来月のこの続きの方言談話の紹介の後にしたいと思います。

連載  
218

方言談話資料に見る  
小松方言の特徴 その2  
―大杉町(下大杉町・大杉中  
町)方言の自然談話②―



方言談話中に登場するGさんは、右の写真の大杉ミュージカルシアターのガート(Gart)さんです。

前回に続けて、1996年10月2日に大杉町生活改善センターで収録した4名の話者(A 大正6年生まれ・男、B 大正4年生まれ・男、C 大正4年生まれ・男、D 大正11年生まれ・女)による自然談話を紹介し、特徴的な方言(傍線部)について簡単に解説します。

等は省略しつつ、表音的片仮名表記(文節分かち書き)で示し、適宜( )内に共通語訳を付しました。なお、談話中に登場する個人名はイニシャルで略記しました。

A コクサイイテキナ(国際的な) コトモハナシ シエンナンシネー(しなくてはいけないしねえ) チイキテキナ(地域的な) コトモ ハナシ シエンナンシネー。ココニ オイデルヨーナ(いらっしやるような) ホラ アノ ガイジンサン。アラ Rサンチュント Gサンチュートンネ。アంతト オンナシヤGサントユノアンネー アワズノ(粟津の) ホーノ タンダイノ エーゴノシエンシエー。アノ Rサントユノアドッカ アタカノ(安宅の) ホーノコーバノアメリカトノ ツーヤクオシテオイデルミタイデネ ヨル イツテ モー ムコア コツチャ ヨルデモ ヒルヤサケネ(昼だからね) ソーユーシゴト シテオイデルンテ。ガイジンサン シンシエツナケーネー(親切だからね) テー アゲテンネー ワタシラ サンキューシカ オボエト

ランサカイ ソレヨリ ユエンケドネー。  
【解説】※前回取り上げた談話中の方言を含む  
・トシヨリヤサカイ、トイモンジャサカイ、ユーサケナ：〜サカイ、〜サケは共通語の「〜から」にあたる理由・原因の接続助詞です。関西地方で生まれた〜サカイが北陸地方に伝わり、後に〜サケの形も生まれました。シンシエツナケーのケーはサケのサがさらに脱落した形です。

・イワンナント、シエンナンシ：〜ンナンは動詞の未然形に接続して「〜なければならぬ」の意味を表します。  
・オイデル、シテオイデル：オイデルは北陸の方言で動詞「行く、来る、いる」の尊敬表現として使われます。補助動詞「〜ていく、〜てくる、〜ている」の尊敬表現としての〜テオイデルも使われます。

連載  
219

方言談話資料に見る  
小松方言の特徴 その3  
―大杉町(下大杉町・大杉中  
町)方言の自然談話③―



話の中に登場する、公民館を改修した建物というのが、大杉ミュージカルシアター(大杉中町劇場)です。

今回も、前回に続けて1996年10月2日に大杉町生活改善センターで収録した4名の話者による自然談話を紹介し、特徴的な方言(傍線部)について解説します。これまで同様、文字化にあたっては表音的片仮名表記(文節分かち書き)で示し、適宜( )内に共通語訳を付しました。

A アノ ヒトモ ネッシンナシ(熱心だし) ソレカラ イマン Gサンモコナイダ トーツタラ キレインナツタデシヨットテ キーテ オー スマートン(スマートに) ナツタネー チュテ ホラ アッコ(あそこ) シェンフ。  
D ゲンカンモ ナオイタンテ(直した)ので。  
A カイシューシテ コーミンカンのイリクチャシネ シューリシテ ナカナカノ ガイジンサン シンシエツナシネー カンシンジャツテ(感心だ)て。  
D ホツレガ(それが) オッカシーツムカシノ カズキオケニ(担ぎ桶に)ナンジャラ イッパイ イレテ。  
A ウン ソシテネー ムカシャー ホラ ビールノ オケヤトカ シエメンタルミタイナ(セメント樽みたいな)アツタワンネ。アレガ シモオースギノ ミセ シタ ヒトア タクサンアツテ ホシテ ステルユトツタラアノ ヒトア キテ コレ イラーン

ノカネトツタサケー(要らないかねと言っていたから) オー イランノヤツテ。ボク モロテクカツチュネ。  
C アレクギ イレタンデネーカ。  
A クギ イレタツタガヤ(入れてあった)んだ。  
【解説】  
・ジエンフ、シンシエツ、シエメンタル：小松市を含む北陸方言では、高年層でセ、ゼがシエ、ジエと発音されることがあります。中世末期までの京都(中央語)での標準的発音の名残です。  
・ナオイタ：かつて西日本で広く見られたサ行四段五段動詞のイ音便形の名残です。  
・カンシンジャ、ナンジャラ：現在はやりに変化している断定の助動詞(共通語のダにあたる)の元の形のジャが大杉では聞かれました。  
・イリクチャシネ、アツタワンネ：小松方言では終助詞ネの前に短クンが挿入される特徴が聞かれます。  
・モロテク：モロテは八行四段動詞「貰う」のウ音便形モローテの短縮形です。

連載 220

方言談話資料に見る  
小松方言の特徴 その4  
―大杉町(下大杉町・大杉中  
町)方言の自然談話④―



方言談話が収録された大杉町生活改善センターです。

今回も引き続き1996年10月2日に大杉町生活改善センターで収録した4名の話者による自然談話を紹介し、特徴的な方言(傍線部)について解説します。文字化にあたっては表音的片仮名表記(文節分かち書き)で示し、適宜( )内に共通語訳を付しました。

- B ムカシャ アーユモンニ イレテ  
カ<sup>ン</sup>デ<sup>担</sup>いで。 アルイタンヤ。
- A ムカシャーネ アノ クギバコニネ  
ホラ イマカッテ(今だつて) ビール  
ノ シエメンダルミタイナ(セメント  
樽みたいな) アルワシネ。アレオ ア  
コノ Gサンガ モロテイッテ(貰っ  
ていって) グワイジンサンニ(外人さ  
んに) モツテコイノ シナモンジャワ  
イッテ。
- D アノ ヒトワ ナンデモ ウン。
- C ソヤケドー アノ カミノ フクロ  
ニ ナランサキニ(紙の袋になる前  
に) シエメントア アーユー デカイ  
オケヤツタンヤ。
- A ウン ソーソー オケヤツタ(桶だつ  
た)。
- C アレ コラエテ(がまんして) アル  
クノア ヤットミタイナモンジャツタ。
- B ソヤ ソヤ。
- C アトネア(後には) フクロヤツタン  
カイ。
- A オー ワタシラントコ アレデ。
- C マツサキニ アレー キノ オケ

ヤツタンニヤ。ドツカテ シエメン  
イレ。ソツデ(それで) ダイブ カワツ  
タンヤ。ソツデ アツコノア イマー  
シエーネンノイエノ シタノ ヨー  
スイ コツシエル(造る) シブンニア  
(頃には) カミンフクロン(紙の袋に)  
ナツテ。

【解説】  
・アレア、シエメントア、アルクノア、アト  
ネア、アツコノア、ジブンニア：傍点部は  
助詞のワまたはガの子音が弱化して母  
音のAだけが軽く添えられたように聞  
こえるものです。  
・カンデ：「担いで」の意味のカンデは、  
白山麓の白峰方言などでも聞かれま  
す。  
・グワイジン：傍点部は、歴史的仮名遣  
いの「ぐわ」にあたる発音(合拗音)の残  
存例です。石川県加賀地方の高年層で  
時々聞かれます。  
・オケヤツタンニヤ：断定の助動詞ヤの  
前にンがきたためにンニヤに変化した  
形で、福井県嶺北地方から加賀地方南  
部で聞かれる特徴です。

連載 221

方言談話資料に見る  
小松方言の特徴 その5  
―大杉町(下大杉町・大杉中  
町)方言の自然談話⑤―



神社や寺院によって、独特の盤持石があります。(写真は菟橋神社境内に安置されている盤持石)

今回も、前回までの続きで1996年10月2日に大杉町生活改善センターで収録した自然談話を紹介し、特徴的な方言(傍線部)について解説します。文字化にあたっては、これまで同様、表音的片仮名表記(文節分かち書き)を用い、適宜( )内に共通語訳を付しました。

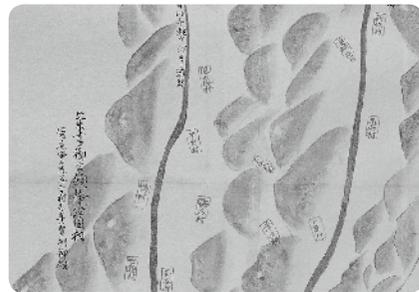
- チョット。ポーシツノネ(防湿のね)  
シエメンブクロン(セメント袋の) ナ  
カエ ウスイ ヤツガシツケ ウケン  
ヨーニネ(湿気を帯びないようにね)。  
ハジメワー ロクジュッキロヤツタン  
ソツギア(その次は) コジュッキロ  
ナツテ イマ ヨンジュッキロ。ヤツパ  
リ オンナシニ(同じように) オモ  
テー(重たい)。
- B ソーリヤ ソヤ。イマデア ロク  
ジュッキロデア ウケレン(持ち上げら  
れない)。
- A オー ソーソー。ムカシワ ロク  
ジュッキロジューロツクワン(16貫)カイ  
ネー。
- D イヤ オナシ(同じ) ロクジュッキ  
ロデモ コメダワラナラ(米俵なら)  
ウクカモシレンケドシエメントノ フ  
クロデア トテモ ウケン。
- A モチニクイワネー。
- B タワラデ ロクジュッキロノ コメ  
ノ リョーテオズーット カタンデ  
(担いで)。
- C アレア ホヤケド ウマク ナワ

カカッテ タテナワ(縦縄が) カカッ  
トルヤロ。ワツリヤイ(割と) アゲルケ  
ド バンモチイシツチユノア(盤持石と  
いうのは) ナワ ナンモ カケトラ  
ン。ホーデネ ナガサー ネーンジャ。  
A イマデモ ヤツパ イシノ コノ  
マルイ ヤツオンネ コノヘンニモ  
マダ オミヤサンノ トコニ アン  
ナー。
- B シトビョー(四斗俵ほどの) コツツ  
イヤツ(大きいやつ)。

【解説】  
・シエメンブクロ：高年層でセがシエと  
発音されることがあります。中世末期  
までの京都語(中央語)での標準的発  
音の名残です。  
・ジューロツクワン：前回取り上げたグワ  
イジンと同様、歴史的仮名遣いの「ぐわ」  
「ぐわ」にあたる漢字音(合拗音)の残  
存例です。  
・バンモチイシ：力試しの重い石で神社  
や寺院などに置かれていました。  
・シトビョー：米が4斗(約60キロ)入る  
俵です。

連載  
222

方言談話資料に見る  
小松方言の特徴 その6  
―大杉町(下大杉町・大杉中  
町)方言の自然談話⑥―



賀州能美郡図籍(金沢市立玉川図書館所蔵)には、天領であった丸山村や新保村(新丸村)が朱書きされています。

前回までに続いて1996年に収録した大杉町での自然談話を紹介し、特徴的な方言(傍線部)について解説します。文字化にあたっては、これまで同様、表音的片仮名表記(文節分かち書き)を用い、適宜( )内に共通語訳を付しました。

A トヤマノ(富山の) コトバネ コレ

デクスリヤ バイヤクノ(売葉の) マワツテ イレツサケ(葉を)入れるから) ワリカタ(割と) ハナシモ ワカリヤスイシネ キキヤスイシネ。フクイノ コトバデ アノ チヨット コノヘンノ コトバヨリ シナヤコーンヤネ(しなやかだね) ユーコトガ。D ココワ ホンマニ コトバガ アライ トコデ。

A ホイテ(そして) コノヘンノ チヨット アライシネー(言葉が)荒いしね)。シンマルムラ(新丸村) イクトーンネ コトバワ ジョーヒンナル(上品になる)。アト フクイネ(福井に) チカイ カンケーカ カガノヒヤクマンゴクノ ジョーカガイヤツタ(城下外だったんだ。カガノ ヒヤクマンゴクア アコニ(あそこに) ケンリア ナカタンニヤ。アコエ ンデドロボーシテ ニゲテ ハイッテモカガノ トノサン トメレナンダ(止められなかった。フクイノ ホーカラヘーケア(平家が) ニゲテキテンネー) ホイテ モーヒトツツンネー) ワタシ

ラー シランケドネ コノヘンニイ チョーノキガ 銀杏の木が) タクサンアル。コレワ ヘーケノ オチムシヤガジブンラ ニゲテキタ トコニイ チョーオ ショーレーシタンデ ソレデ コノヘンネモ オチムシヤガ スコシ キトツタンデ。

【解説】

・シヨ、ハ、カ、イ、ヤツタンヤ：旧新丸村。白山麓の白峰などと同様、加賀藩の支配を離れた幕府直轄の天領であったことを言っています。  
・イクトーンネ、ニゲテキテンネー、モーヒトツツンネー：小松方言では終助詞の前に短くンが挿入される特徴が聞かれます。  
・アコ：小松ではアッコも聞かれますが、「こそあど」のココ、ソコ、ドコに対するアコ。共通語ではアソコになるところが、体系的に形の揃ったアコが聞かれます。

連載  
223

方言談話資料に見る  
小松方言の特徴 その7  
―大杉町(下大杉町・大杉中  
町)方言の自然談話⑦―



大杉町の人々の暮らしを見守り続けてきた大杉神社のイチヨウ(小松市指定文化財)

今回も1996年に収録した大杉町での自然談話を紹介し、特徴的な方言(傍線部)について解説します。文字化にあたっては、これまで同様、表音的片仮名表記(文節分かち書き)を用い、適宜( )内に共通語訳を付しました。なお、大杉町方言の談話資料の紹介は今回で終わり、次回からは丸山町の方言談話を紹介します。

A ワタシラ ソンナコトア ハナシ

テ イチョーノキア(銀杏の木は) イチョー(銀杏の実が) ナルサカイ(ウエタンデナイカト オモトツタケンドヤツパリ ソーユー カンケーデ コノ オースギノホーカラ シンマルムラネ(新丸村に) イチョーノキガ ヨケー(たくさん) アルンデナイカ。ソユー コトモ ユー ヒトオイデタネー。シンマルワ イマワンネー(今はね) フユワネー イツケン イワナノ(岩魚の)ヨーシヨク シテオイデルンデー) ナツワー ゴロツケン ジブンノ ギヤイサン(財産としての山)ガ ホラ モツテオイデツサケ キター スンドルケド フユワー イツケン。ホシター フユワ ダレモ オランガヤ(いないんだ) ハナタテマチ(花立町)。デ マルヤマーネア(丸山には) ニケンホド オイデルンデイ マモ オイデツカナー フユ。C マー フユワ ソヤンド(そうだけども)。A ホトンド オランノヤ。

B オランノヤリヤコソニヤ(いないらしいことには) シンボネア(新保には) ナツダケヤツ ナツダケ イツケン。

A シンマルムラヤ マルヤマネ。ナツワ ゴロツケン アノ キテオイデルワネ ヤマノ クワンリスルトカツテネ。

【解説】

・ナルサカイ、モツテオイデツサケ：「サカイ、」サケは共通語の「〜から」にあたる接続助詞です。関西地方で生まれたくサカイが北陸地方に伝わり、後に「サケ」の形も生まれました。ここでは同じ話者が両方の形を使っています。  
・オイデタネー、オイデルンデ、オイデツカナー、シテオイデルンデー、キテオイデルワネ：前の三つのオイデルは「いる」の尊敬表現、後の二つの「テオイデル」は補助動詞「〜ている」の尊敬表現として使われています。

連載  
224

方言談話資料に見る  
小松方言の特徴 その8  
丸山町方言の自然談話①



丸山町で開催されるヤマメ放流と釣りのイベントには毎年多くの家族連れが訪れます。

今回からは、前回までの大杉町方言の談話の中にも登場した、大杉町よりさらに山間の集落で江戸時代は天領でもあった丸山町の方言談話を紹介します。

丸山町方言の自然談話については、『小松市立博物館紀要』34号に掲載の拙稿「石川県小松市郷谷川・淳上川流域の方言」に所収の文字化資料から抜粋します。

丸山町の方言談話は、1997年8月

30日に収録した(時間にして10分程度)丸山町生え抜きの2名の話者(A 大正8年生まれ・男、B 明治43年生まれ・女と小松市東町生まれの同席者)C 大正12年生まれ・男による会話です。方言談話の文字化にあたってはこれまで同様、無意味な挿入句などは省略しつつ、表音的片仮名表記(文節分かち書き)で示し、適宜( )内に共通語訳を付します。語中の方言音は原則鼻濁音となりますが、破裂音と区別せずにガギゲゴと表記します。

- A モー ゴハン タベタカッテユーコトバガ ナレンサケネ(慣れないからね) ハイヨーニ(話すのが早いように) オモウ。デー チョード コー トーショエガッコン(高等小学校にナルト ミナ コカソン)(5カ村) コーリユーオ(交流を) シタ。ホイデヒリタコツテ。
- C ヒリツチユノ オヒルチユー イミヤロイネ。

- A ソヤ オヒルオ クターカイト。ソレガ ハイイサカイ ヒリタコテユートル。ホンデ アクセントワ(アクセントは) シンボワ(新保は) ソノワリンネ(その割にない)。ハナタテガ(花立が) アクセントア ソヨイ。
- B ソーヤッター。
- A ウン。ホイデ ハナタテノホ アルシ シンボワ ワリト ナンヤシ オハラモ(小原も) ワリニ マルヤマリモ(丸山よりも) コトバワ ハイカラヤッターンヤ。

【解説】

・ヒリタコ：ヒリ(屋で飯)とタコ(食べたか)の意味のタベタコの省略形)の合わさった形と思われる。  
・コカソン：5カ村とは、新保(新保出)木地小屋を含む、須納谷(現花立町)、丸山、杖(現在は津江と書く)、小原の5集落を指します。  
・アクセント：訛りに近い意味と思われる。

連載  
225

方言談話資料に見る  
小松方言の特徴 その9  
丸山町方言の自然談話②



この道は近い将来、丸山町と福井県の勝山を結ぶ国道416号線です。

今回も前回に続いて市内南東部の山間の集落、丸山町の方言談話を紹介します。3名の話者のうちA・Bが丸山町生え抜き(A 大正8年生まれ・男、B 明治43年生まれ・女)、Cが小松市東町生まれの同席者(大正12年生まれ・男)です。方言談話の文字化にあたっては、これまで同様、無意味な挿入句などは省略しつつ、表音的片仮名表記(文節分かち書き)で示し、適宜

( )内に共通語訳を付しました。

- A イゼンワ コノ マルヤマガネメイジイシン ナツテ ワシラノ オヤノオヤラワ(親の親たちは) ワルドシントシ フクイケンヤ エツジエノホーガ(越前の方が) チカイン。ホラー コツカラ アルイデー コマツニ ハハオヤラ ンナ ホーコーニ イツタンヤケドノーハチリモ(8里も) アルデショエ。ムコワ ロクリヤ。シンボヤッターラ イチジカンホドデイケル。ホンデー カツチャマエ(勝山へ) シナモン カイニ イツタンヤ マルヤマテモ。
- C アノ タケダゴエ(竹田越え) シンヤロ(するんだろ)。
- A ウン ソーソー。
- C ソレ イマ タケダゴエア ミチアナイチユー。イマ ソコニ オツテンヒトアー マルヤマカラ コザッターヤツテ。
- (中略)
- A イマー コクドー ハシットルト

- コワ チョット ミチガ イゼンワ コツチノホーノ ジソーサン アルケド ソコオ カヨテ ワシワシユエセンゴ ナンベンモ カツチャマニ オジサンガ オルモンデー チョイチョイイマユー キジゴヤワ コツチノ ワルドシントキ ヨー コイヤ ユーテ ウラントコノ ジーノー アニキガ キツアンノ イエヤ。
- B アーソーカ。

【解説】

・ワルドシ：「悪年」で「凶作の年」の意味です。  
・エツジエン：福井県敦賀市以北の旧国名「越前」の方言的発音です。  
・カツチャマ：福井県勝山市の「勝山」の方言的発音です。  
・ウラ：石川県加賀地方から福井県嶺北地方にかけて使われる方言の自称代名詞で、オラが変化した形です。

連載 226

方言談話資料に見る 小松方言の特徴 その10

丸山町方言の自然談話③



丸山町の大山林道の峠です。この峠を越えると白山市鳥越の方に抜けられます。

本連載を始めて19回目の新年を迎えました。今月と来月の2回は、引き続き市内南東部の山間の集落、丸山町の方言談話を紹介します。話者Aは丸山町生え抜き(大正8年生まれ・男)、Cが小松市東町生まれの同席者(大正12年生まれ・男)です。文字化にあたっては、これまで同様、表音的片仮名表記(文節分かち書き)で示し、適宜( )内に共通語訳を付しました。

- A ウン コッチノホーノ アレアー  
ハナダテゴエ(花立越え)ツッテ ジゾー  
サンガ フタツモ アルケドー。イマ  
ズイド(隧道)トネルオ トー  
ソート スルノワ アソコワ トーゲ  
ミチワ アツカシランケド コツ  
チノアレアー ヒラダニ(平谷)ジャ  
ナイワ ベンテンバシ(弁天橋)ノ  
チョット テマエオ ミギニ アガッ  
テ カプト(兜)ノ ダイニチ(大日)  
チヨージョーエ アガル ホンリユー  
オ ヒダリノワ ホンリユーデナイサ  
ケ(本流でないから) ミギノ カプト  
ノガ(兜の方が) ホンリユーデ ソレ  
オ ホンリユーニ ソーテ(沿って)イ  
クノガ イゼンノ カイドーヤツタンヤ  
(街道だったんだ)。
- C ウン。ソンド シラミネ(白峰)ニ  
イカレタノ(行けたの) イツゴロマ  
デ イカレタモンヤイネ(行けたも  
のだね)。シエンゴ(戦後)も ヤツパリ  
イットタンヤロ。
- A ンー ワシラモ イットツタ(行っ  
ていた)。イッタ オン。アー ソレカ  
ラ エーリンシヨノ(宮林署の) サ  
ギョーインガ カツチャマ(勝山)カラ  
ヨケー キトツタ。
- C ホー イヤ ソシター シラミネモ  
ヤツバリ イッタモンケネ(行ったもの  
かね)。
- A シラムネカ(白峰)か。
- C オン シラミネヤ。
- A シラムネゴエワ ワシ イッタコ  
トアネー。
- C アー ソースカ。フィン トユーコ  
トワ シラミネト ココラガ コー  
リユーガ アツテ コトバガー ニト  
ランカドーヤラト(似ていないかどう  
かと) オモテヤ(思ってた)。
- 【解説】  
・ハナダテゴエ…かつて新丸村から東の  
白峰村に向かうために利用された峠  
道。  
・カプト…山の名前。ダイニチは大日山  
のこと。  
・ヨケー…「余計」から「たくさん」の意  
味。

連載 227

方言談話資料に見る 小松方言の特徴 その11

丸山町方言の自然談話④



昔、丸山町の人々は峠越えをして白峰まで柿玉を売りに行きました。

前回までと同じく、市内南東部の山間の集落、丸山町の方言談話を紹介します。2名の話者A・Bはともに丸山町生え抜き(A 大正8年生まれ・男、B 明治43年生まれ・女)です。文字化にあたっては、これまで同様、表音的片仮名表記(文節分かち書き)で示し、適宜( )内に共通語訳を付し、傍線部には簡単な解説を付しました。

- B マルヤマワ シラミネカラ(白峰)か  
ら) キタモノア オランナー。
  - A マルヤマワ キタモノア オラン。ス  
ノダニワ(須納谷)は オルカモシレン  
オダケガ(織田家)が。ソー ユーガヤ  
(言っただ)。(中略)
  - B ホウト マユオ カンデー ヤマ  
ゴエデー アレア ドコ イツタンエ  
アノ マユ ウンニ(売りに) イッ  
タンニヤワレ。ホラ イチニチガカリ  
デ アーシャ イテ イツテクルト  
イッカモ(何日も) アーシャ イテー  
ユータワ オツタワレ。マユオ ワタ  
シラ シタン。マユ カンデ ソコエー  
ウンニイッタヤワレ(売りに行ったんだ  
よ) マユオ。
  - A マユオカ。ソレアー カーチャン イ  
クツグライノ トキヤ。
  - B ソレ イクツヤ オボエネーケド  
ソレガーワタシラ マユ コシラエタ  
ラ ソノ マユオー ホラ ヤマゴ  
エ イクツモ コエタリ アガツタリ  
ソエツテ イケテ(いらつしやって)。ホ  
イト コンド アーシガ ミツカホ  
ド イトーテ オエン(痛くてたまら  
ない)。
  - 【解説】  
・カンデ…「担いで」の意味のカンデは、  
小松市の山間部や白山麓の白峰方言な  
どで聞かれます。  
・イタンニヤワレ、オツタワレ、ウンニ  
イッタヤワレ…文末詞「ワレ」は、話し  
手が相手に「くだよ」と訴えかける場合  
に使われます。  
・アーシャ、アーシ…旧能美郡の方言で  
は、このように一部の2拍名詞(頭高の  
アクセント)で1拍目が伸びて発音さ  
れる特徴があります。
- 付記…本連載の第1回は1998年4月  
でした。当初はこんなに長く続けること  
になるとは思いもみませんでした。が、気  
が付いたら19年目が終わろうとしていま  
す。この度、諸事情から来月号で本連載を  
終えることになりました。長年ご愛読下  
さった皆様に、改めて御礼申し上げます。